
Eclipse

楳美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Eclipse

【Nコード】

N5978X

【作者名】

樫美

【あらすじ】

始まりは、ある満月の夜だった

人を傷つけ、自身を傷つけながら、生き延びるために生きる者。

虚無感と満たされない欲望に苛まれながら、快楽を求める者。

断ち切れない情に揺られながら、誓いのために闘う者。

すべてを失いかけ、ひたすら守るために生きる者。

自由を求め、なりふり構わず走り続ける者。

消えない傷を抱える5人の男女が、巡り合い、引き離されながら、見えざる「闇」と闘う話。

P r o l o g u e ? - A k i t o

p r o l o g u e ? A k i t o

目を開けると、暗闇だった。

手探りで寄せた枕もとの携帯電話のディスプレイはAM3:40。
ベッドに入ってからまだ一時間も経っていない。うんざりして、俺
は髪を掻き毟った。

寝付けないのではなかった。いつものように調べ物をしている最中
に襲ってきた睡魔に勝てず、そのままベッドに潜りこんだところま
では覚えていた。だが、その後は記憶が途切れている。

夢を、見ていた。

後味の悪い夢であったような気はするものの、思い出せない。夢を見ること自体、ずいぶんご無沙汰だった。

ただ、急に目が覚めた。

突然浮かんでいた水底から引きずり出されるように、何の前触れもなく、だ。おかげで再び目を閉じてみても眠気はまったく感じない。それまで横になっていた気だるさや動き辛さもなかった。身体中の神経が覚醒している、そんな感じだった。

もう寝付けない。悟って、俺はベッドから降り部屋を出た。

外の空気にはまだ夏の余韻があるものの、頬を撫でるのはひんやりとした夜の風だった。

非常階段の欄干に身を預けながら、煙草に火を付ける。一泊六千円のビジネスホテルには、バルコニーなんてしゃれたものはない。狭苦しい八畳間では解放感もあったものではなく、こうして外気に触れるにはもってこいの場所だった。

静かに灯る煙草をゆっくり吸い込み、肺から脳へ駆け巡り、煙となつて出ていくニコチンを味わう。ここ最近日中は気を休める余裕などないに等しく、満足に一服することもままならなかった。今度の仕事はそう難しくないのが幸運だったが、パソコンに向かってキーボードを叩くだけの頭脳労働であってもやはりエネルギーは削がれるものだ。休めるうちに休んでおくに限る。

先刻やつとのことで終わらせた仕事は三日連続徹夜で、さすがに堪えるものだった。もつとも、あの切羽詰った状況で眠っていられるような図太い神経の持ち主がいたらぜひともお目にかかりたい。ただし、一瞬でも気を抜けば最期。今頃六本木の路地裏で野たれ死んでいるだろう。

一つの仕事を終えるそのたびに、封じ込めていた様々なものが一気に舞い戻ってくる瞬間がある。それは空腹感や眠気のような生理的な感覚や、その日の天気予報、読み途中の本の内容などの他愛もない日常の出来事、そして記憶。

封じておいた何もかもが脳に甦るその感覚だけが、教えてくれるのだった。

まだ、忘れていない。

まだ、生きている、と。

アルミ製の冷たい柵に手を掛けて夜空を仰ぐと、藍色の雲が切れて西に傾きかけた月が姿を現した。丑三つ時にもかかわらず、ネオンとヘッドライトに染まった街がさらに明るさを増す。

啞えたままの煙草の煙を吐き出すと、その紫煙は煌々とした満月へと昇っていき、そして夜空に消える。その揺らめきと淡い月光は、手を伸ばすまでもなく微かに揺れた空気だけを残した。

Everything is in a frow .
変わらないものなんてないんだ、晃斗。

「あの人」が遺した言葉。

ヘッドライトの帯も、月にかかる雲も、一切の干渉を受けることのない時の流れさえも、止まることなく変わりゆく。

自分自身、あれから時の流れに逆らうことなく、日々を過ごし生きてきたと思う。広く、深く、そして暗いこの世界を自分の目で見て、鍛えられ、経験も重ねた。今こうして自分の脳に言い聞かせているのが、何よりの証拠だ。

変わった。強くなった。あのころとは違う

右腕の刻印を握り締める。手のひらが、微かな脈動を感じとる。

だけど、わかっている

過去だけは、決して変わりはない

たとえ自らがどれだけ変わろうとも、犯した過ちや忌まわしい記憶が消えることも、失ったものが還ってくることもない。それはこの先何があるうとも受け入れ、悔やみ、償い続けなければならない罰であり、背を向けることは許されない。

あの鈍色に光る刃を握った瞬間に覚悟した。

あの人がもう戻ってくることはないを知った日に決めた。

闇の中で、生き続ける

「…！熱…っ」

間の抜けた声とともに我に返る。

いつの間にか煙草は短く縮んでおり、大半がすでに灰と化してしまっていた。いつも持ち歩いているステンレスのシガーケースに吸殻を入れ、ポケットの中でもみくちやになっているマルボロのケースを引っ張り出す

「空かよ」

独り言とともに、箱は乾いた音を立てて手の中でつぶれる。ごみ箱などある訳がない。仕方なくそのままポケットに突っ込みながらも、目線は広がるライトの海に留まったままだった。

人間の手が造りだしたモノだとわかっていても、手を伸ばせば届きそうな距離にそびえる高層ビル群や、街を縦横に走るハイウェイに散りばめられた灯りの数々は、やはり壮観だった。まぶしいほどの夜景というのもなかなか悪くはない。肌に纏わる夜風とともに、目映く彩られた大都会を眺めていた。

突然、ふっと明りが途切れた。

見上げると先刻まで浮いていた月は雲に覆われており、その姿は見えなくなっている。町は相変わらず光が敷き詰められていたが、目の前にフィルターがかかったような味気なさに覆われた。

瞬間、空気が張りつめる。

反射的に、一度だけ深呼吸をした。酸素を全身の神経に行き渡らせ、意識を張り巡らせる。

が、程なくしてふっと息を吐いた。

「おまえか」

「ご無沙汰だね、晃斗」

緊張させていた糸を緩め、再び手摺りに背をもたせかける。階下の踊り場にあつたのは、ワイシャツをルーズに着こなした銀髪の男の姿だった。

「一瞬誰だかわかんなかったよ」

「ひどいなあ。殺気丸出しで殺されるかと思つたよ」

満面の笑みで軽口を叩くそいつは、いとも自然に俺の隣に並ぶ。

「仕事か？」

「副業の方のね。そしたら君が動いてるって情報をキャッチして。すごい大仕事だったみたいだね」

「やっぱ流れちまってたか」

「何故か国外逃亡して、シカゴに飛んだってことになってたけど」

軽く笑い飛ばす奴に、そうか、と頷いておく。

「そっちはどうだ」

「この一週間だけでコード4が3件。本部に目つけられるのも時間の問題じゃない？」

「じゃなくて」

組織のことを答えた奴を、俺は遮る。

「お前のこと聞いたつもりだったんだけどな」

責める気はなかったのだが、自分が出した声の温度は下がっていた。気まずい空気が流れる。

「俺はもうあそこの人間じゃない。いまさら何とも思わねえよ」

本心だった。三年前にあとにしてから、あの閉ざされた空間に戻りたいと思ったことはただの一度もない。

無言になった踊り場を、風が擦り抜けていく。重くなった空気に負けて、ポケットを探った。ひしゃげた箱が指に触れ、煙草を切らしていたのを思い出す。

「なあシン、煙草」

「ないよ」

「だよな」

言い終わる前に、シンは苦笑とともに吐き捨てる。俺も苦笑いで応える。そして、どちらからともなく、声を上げて笑った。

奴も、変わらない

「で？こんな時間に何の用だ」

欄干に背中から持たれかかるようにして、空を見上げる奴に尋ねる。

「あれ、今何時？」

「4時くらい。おまえ相変わらず時計持ってねえのか」

「別にいらないし」

「携帯は」

「あー、電源切ったままだ」

そう言ってポケットから取出したそれは、最新型のスマートフォンだった。こういうところはしっかりしているのも含めて、相変わらず

「本当、適当だな」

「ありがと」

カンに触る笑みとともに、奴は空から俺に視線を移す。

断じて誉めたつもりはない。だが俺が指摘する前に、シンの声は真

剣なものになった

「晃斗に知らせておきたいことがあるんだ。個人的に」

その目は、すでに業務モードだった。それを正面から捉え、奴を見据える。

「今、ここからすぐのホテルに、ある大物が滞在してるんだけど」

「ホテル・グラン赤坂、最上階2803室、だろ？」

「なんだ、知ってたんだ」

「まあな」

俺の先回りにも驚くことなく笑みすら浮かべながら、シンは一段と声を潜める。

「その大物が明日、正確には今日、狙われるっていう情報が入ってきた」

「“4”の標的になったのか」

あえて“コード”を使って尋ね返すと、シンは無言のまま頷く。舌打ちしたくなるのを抑え、続けてくれ、と先を促した。

「僕の仕事とは関係なかったんだけど、たまたま浮かび上がってきたさ」

「あの黒羽征成が、か」

国内屈指の高級ホテルの最上階に滞在している人物、黒羽征成は、世界的にもトップレベルの総合電機メーカー「ウイング」の会長にして国内で五本の指に入る名家、黒羽家の現当主である。だが裏社会においては、もう一つの肩書きのほうが有名だった。

アメリカ中央情報局、CIA唯一の日本人次官。

そんな大物が暗殺されたともなれば、世界中に激震が走る。裏社会のバランスが崩れるばかりか、政治的、経済的にも大打撃は必至だ。

「でかい恨み買うような真似したのか、アメリカに喧嘩売ろうとしてるバカがいるのか」

「どっちもありそうだけど、バックまではわかってない。実行役は

ジャックが雇われてるらしい。黒羽って言うと最近色んな話聞きからさ」

「気をつけるに越したことはない、だろ？」

余裕に聞こえるように、俺は言った。シンは溜息を吐きながら笑い、続ける。

「標的の黒羽会長は多分関係者も一緒に行動してる。巻き込まれたら厄介なことになるだろうね」

「俺が用あったのは、あそこのホテルのメインコンピューターだけだ。上の階が創立記念だろうが誕生会だろうが、どうでもいい」

「やっぱり、そこまでわかっててだったんだ」

独り言のように、シンは小さく呟いた。

「おまえだって、わかってたうえで来たんだろうが」

「晃斗の居場所を突き止めるのが一番時間かったよ」

「そりゃどうも」

苦笑いするシンに、俺も苦笑で応えた。こちらは極秘任務を遂行し

たばかりの身、ちょっとやさつとで居場所が割れてしまったら堪ったものではない。

「君にかければホテルのコンピューターのハッキングと証拠隠滅くらいなら余裕だろうけど、赤坂本部も動くっていう話だ。まあせいぜい巻き込まれないように、って心配してきてみたんだ」
「暇つぶしの間違いだろ」

あはは、と声を上げてシンは笑う。否定しないところが奴らしい。

「君の動向が気になったのは本当だよ。こっちの仕事に支障が出たら困るし」

「まず自分のこと考えた方がいいんじゃないかねえの。総本部にまで情報が行ったら、どうするつもりだ」

「僕が個人的に接触しても問題はないよ」

「お気楽だな。いつおまえの寝首かくことになるかもわかんねえぞ」

今はジャックなんだから。と、そう続けた。

先のことなどわからない。ただその日その日を生きていくのみだ。

いつかすべてが終わる、その時まで

「もう行け、シン」

「えー、もう？」

「下手に動いて余計なリスク冒すな。鉄則だろ」

たたみかけるように言うと、シンははいはい、と二つ返事で応えた。寄り掛かっていた柵から身体を離し、ぐっと伸びをする。やがてふうつと小さく息を吐くと、こちらを見ることなく背を向けた。

「じゃあ、お邪魔様」

軽く手を上げて去ろうとする後姿を、俺はシン、と呼び止める。

「近いうち、店に顔出しにこい」

やけにゆっくりと、奴は振り向く。目が笑っていない。

「トマトと水菜のパスタと緑黄色野菜スープ、コーヒーゼリーつき。
あと100パーのオレンジジュースね」
「了解」

一番高いセットメニューをすらすらと告げたシンは満足そうに頷き、
足音とともに階下へ消えていった。その後ろ姿を見送らず、俺は非
常階段から廊下に通じるドアをくぐった。

無償に煙草が欲しかった。

部屋に戻り、パソコンと少ない荷物をアタッシュケースに詰め込ん
で、その脚でチェックアウトをしてホテルを跡にした。フロント係
は一瞬不審そうな目で俺を見たが、またのご利用を、とにこやかに
礼をした。背を向けた直後にエントランスのガラス越しに映った大
あくびは、その勤勉さに免じ見なかったことにした。

傍にあった自販機で煙草を買い、すぐに封を切り火を付けた。紫煙を吐き出しながら、遙か彼方にある高層ビル郡を目指し、歩く。

やるべきことは決まっている

過去は変わらない

罪は消えない

失った命は、還ってこない

俺の手で、断ち切ってやる

なかったことにできないならば、その息の根を止めて、深く深く葬ってやる

その痛みを背負うのは、俺ひとりで充分だ

満月は、西の空へ沈もうとしていた。

n e x t

P r o l o g u e ? - A k i t o (後書き)

初めまして、樺美と申します。

お目通しいただきありがとうございます！

読んでいただけて、むしろページを開いていただけただけで感激です。

一番最初のプロローグなのでなんのこっちゃ？って要素が多すぎると思いますが、あとあと少しずつ暴いていきますので、気長にお付き合いただけたらと思います^^

P r o l o g u e ? - S h i n

p r o l o g u e ? S h i n

明け方の青山通りは時折タクシーが走っていく程度で、ひどく静かだった。

夏の終わりの空気を纏いながら、ゆっくりと自転車のペダルを漕ぐ。ブリヂストンのクロスバイクで走るサイクリングは、今日も絶好調だ。

このタイプのクロスバイクは、車体もギアもとにかく軽い。東京のような狭い街を走り回るには、下手にマウンテンバイクやロードレーサーを使うよりも、格段に快適だった。近所の商店街にあった昔ながらの自転車屋の閉店に伴い、店長の親爺さんからタダで譲ってもらってから、もう三年になる。定期的なメンテナンスさえ怠らなければ、バイクや車のように数年ターンで買い替える必要もない。最初は別にこだわりもなく譲り受けたのが、今では生活に欠かせない相棒となっている。

紀尾井町のホテルから5分ほど走って、外堀通りとの交差点で信号に引っ掛かった。車も人もほとんど姿を見せないこの時間帯にも、赤と緑のライトは律儀に稼働している。特に急いでいなかったこともあり、僕はペダルを漕いでいた脚を止めた。待ち構えていたように、背中に汗がにじんでくる。

火照った首もとに少しでも風を送り込もうと、上を向いて空を仰ぐ。いい天気だった。さすがに星は見えないが、西の方には傾きかけた満月が霞んでいる。さらにその下には副都心の高層ビル郡の影が、ぼんやりと映っていた。

海の方この故郷を思わせる、煌びやかな虚飾に満ちた大都会。

僕が生まれたあの街には、とにかくあらゆるものが揃っていた。モノ、金、テクノロジー、芸術、軍事力、ゴミ、ヤク、病原菌と、とにかく何でもあった。それらを欲して、あるいは利用すべく、人々は街に集まり、また新たなものを生み出し、社会を回す。そうやって形成されてきた街を、幼かった僕は、汚れた通りで汚れた服を纏いながら、指を咥えて眺めていた。

故郷を飛び出してからは、二つしかなかった僕の世界は一気に増えて、広がった。僕の知らなかった世界には、僕の知らなかったものがたくさん存在していた。

それでも、こうして海を越えて来てまで僕が手に入れることができたものは、一つもない。

今の僕の周りには、あの頃とは比べものにならないほどたくさんのモノがあつて、たくさんの人がいる。食べるのに困らない程の仕事ももらっているし、友人と呼べる人たちもいる。

だけど、足りない

子供の頃からの夢だった、広くて大きな家を買った時も、フランス屈指のシェフのフルコースを堪能した時も、ラスベガスのカジノで大勝ちした時も、僕の中にぽっかりと空いた洞が消えることはなかった。それは時に鈍く、でも確かな痛みとともに疼き、僕を蝕んでいた。

どうすれば、この渴きは潤うのか

何が、この痛みを治めてくれるのか

自問するたび、唇が歪むのが止まらない。

答えがわかったところで、いや、たとえ望むものが手に入ったところで、僕は死ぬまで求め続けるのだろう。

この洞を満たし、癒してくれる何かを…

強い風の音で、都心の交差点に意識が戻った。天を仰いでいた視線を音の方へ向ける。長距離トラックが、黄色信号を猛スピードで走り抜けていくところだった。

随分信号を見送っていたらしい。汗はすっかり乾いていた。赤く浮かんだライトを尻目に、僕はまたペダルを漕ぎだした。

表参道との交差点の200メートルほど手前に建つマンションは、エントランスから洩れる灯りで、必要以上に自己主張していた。

12階建の割に1フロアに二部屋しかないという贅沢な造りが売らしく、区内でも有数の高級マンションだと言われている。知人に薦められるままに購入し、契約時にはそれなりの金額も飛んでいったが、それに見合うだけ住心地もよく、特に不満もない。バイクが停められる駐輪場が完備されていないことが不便と言えば不便だが、下手に目の届かない場所に置くより、自分の部屋で管理できるほうがありがたい。家賃に比例しているのは広さも同様で、自転車の5台や6台置けるスペースならいくらでもあった。

「おかえりなさいませ」

スーツも髪型も文句なしに決めたコンシェルジュスタッフは、自転車を転がしながら通り過ぎる僕に、いつものように精密な挨拶をくれる。僕もいつものようにお疲れ様、とだけ返して奥のエレベーターへ向かう。業務が忙しくても退屈を持て余すのも、疲れが溜まるのに変わりはない。

部屋の冷蔵庫で僕を待ちわびているオレンジジュースのことを考えながらエレベーターの回数表示を眺めていると、鼻をすすする音と、

続いて盛大なくしゃみが響いた。一呼吸おいて、先程より控えめなくしゃみが聞こえる。僕は自転車を押しながら、ホールの更に奥にあるロビーを覗いた。

「馨さん」

くしゃみの主は顔をあげて、僕の爪先から頭まで視線を滑らせてから、シンちゃん、と呟いた。心なしか、鼻声が混じっている。

「仕事帰り？」

「うん。寒くないの？」

「冷房が効きすぎなのよ」

「そんな薄着だからだよ」

ワイシャツ一枚の僕にも人のことは言えないが、彼女はタンクトップにショートパンツという、まるっきりの部屋着スタイルだった。ロビーの入り口に自転車を留め、三度目のくしゃみをした彼女の隣に腰掛ける。

「あいつがね」

「うん」

「メール送ってきたの。三週間ぶりに」

「『仕事終わらせた』って？」

頷く代わりに、馨さんはふっと、ため息を吐くように笑った。

「私、それいつ話した？」

「冬に鍋した時」

「駄目、覚えてない」

「僕のベッド占領して寝ちゃってたじゃん」

「それは覚えてる。シンちゃん家のベッド、シーツも布団も黒いんだもん。あれはインパクトあるよ」

「馨さんの部屋にキティちゃんの特大ぬいぐるみいる方がインパクトでかいよ」

女子だもん、と、彼女はまた自嘲気味に呟いた。僕は何も答えず、傍の自動販売機に向かった。ホットの緑茶が売っていたのでそれを買って、彼女に手渡す。

「待ってる、って返事を送ったの」

両手で握るようにして緑茶を受け取り、馨さんは言った。

「本当は何かをしながら待つのが一番いいと思うんだけど、駄目ね。手に付かない以前に、何もやりたいことが思いつかないの」
「だから、ここにいるんだ？」

「多分、自分がそわそわしながらあいつを待っているのが嫌なんだろう。だったら文字通り、じっと待っててやろうかなって」

「彼、喜ぶんじゃない？」

「どうだかね。別にあいつのために待ってる訳ではないし」

そう言っで、これってツンデレっぽいねなどと、彼女は自己っこみを入れている。僕には彼女が高慢だとは思えなかったが、否定しないでおいた。

「それよりシンちゃん、昨日くれたメール、PDFファイル添付されてなかったわよ」

緑茶を一口飲んだ彼女が、唇を舐めながら言った。記憶を手繰り、前の晩に送信しようとしたまま寝てしまい、今朝寝起きに携帯から送ったメールだと思い当たる。

「あれ、本当？」

「本当？じゃないでしょ。文面だけで理解するの大変だったのよ」

「返信か電話くれればよかったのに」

「よく言っわよ、まともに返してくれないくせに。本当適当なんだから」

「それ、さっきも言われたよ」

「報告だけとは言っても一応仕事のメールでしょう。ミスして痛い目見ても知らないわよ」

「譬さん相手だからだよ。こうやってちゃんと指摘してくれるし」

「お隣さんが失踪とか拉致で行方不明なんて気分悪いじゃない」

「迷惑はかけないよ。その辺は足が着かないようにやってるから」

ならいいけど、とあっさり応えた馨さんは、いる？と、ペットボトルを僕の方に差し出した。オレンジジュースが頭を過ったが、口の中が渴いていたので二口ほどもらった。300cc入りの緑茶は、半分くらいになった。

「意外に熱いね、これ」

「シンちゃんが猫舌なだけでしょ」

「猫舌っていうけどさ、犬とか猿とか、他の動物もあんまり熱いものって駄目なんじゃない？」

ふと思いついた疑問を口にしてみる。

ヒトに飼われている犬や猫ならともかく、野性の動物たちは、舌を火傷するほどの食物を口にする機会などあるのだろうか。自然界には、電子レンジもガスコンロも存在しない。

「そもそも動物は、食物を加熱する必要がないよね。火の使用の有無がヒトと動物の差って言われてるくらいだし。例外もいるかもしれないけど、どうして全動物の中から猫が選ばれたんだろう？だったら犬舌とか、極端な話ティラノザウルス舌とかでもよくない？」

「やっぱり語感なのかな。猫だと身近だし、かつ一番言い回しがよかったとか。だけど猫の方はたまったもんじゃないよね。自分たちだけ舌が弱いみたいな偏見を持たれるんだよ？猫たち自身が一番憤

慨してると思うよ」

「猫舌からそこまで連想するの、シンちゃんぐらいよ」

「多分僕以外にもいつぱいいるよ。馨さんは気にならない？」

「興味はあるけど、気にはならない」

あくびまじりのその応えは、心底どうでもいいと言うふうに僕には聞こえた。馨さんはそれきり無言になりソファの背もたれに沈み込んだ。目を閉じている。退屈がピークに達したのかもしれない。

僕は僕で、ポケットから携帯電話を取出し、切りっぱなしになっていた電源を入れた。タッチパネル式のディスプレイにパスワードを入力し、検索機能呼び出す。猫舌、由来、と検索ワードを入力しようとしたところで、肩にずしつと重い塊が寄り掛かってきた。携帯の画面から目を動かさないまま、僕も少しだけ、頭を傾ける。

「眠いの？」

「この高さが気持ちいいの」

ちょうどいい角度を探っているらしく、彼女は僕の肩に乗せた頭を小刻みに動かす。シャツの隙間から潜り込んでくる髪が、くすぐったい。

「なんで、シンちゃんじゃないのかなあ」

聞き間違いかと思ったが、ぽつん と呟いた彼女の声は、確かに僕の耳に届いた。

「僕じゃ駄目だよ」

肩に掛かるさらさらした茶髪を撫でながら、僕は応えた。

「僕じゃ、馨さんを満たせない」

「シンちゃんも、私じゃ駄目なんでしょう」

彼女の頭にもたれたまま、首を振った。

駄目なんじゃない

彼女は僕にとって、とっくにただの隣人以上の存在になっている。

こうして今、恋人のように寄り添いながらいることに、何も感じていないと言えど勿論嘘になる。お金もキャリアもあって、話もノリも合い、おまけに美人な彼女と数メートルも距離のない隣同士の部屋で生活していれば、特別な感情を抱かない方がおかしい。

彼女といると、忘れられる

僕の中に巣くっている空洞と、音もなく深まっていく痛みを

彼女がくれる心地よい脱力感、僕にとって今やかけがえのない安らぎとなっている。

お互いに認めあつて、飾らず、ただど常に刺激し合っている間柄。そんな関係を、恋人と呼ぶのかもしれない。だとしたら、彼女はこれ以上ない、最高のパートナーになりうるのかもしれない。

けど

「僕がおかしいだけだから」

「シンちゃん」

「馨さんが僕を必要としてくれるだけで、十分だよ」

もしこの気持ちを恋愛感情と呼ぶのだとするのなら、尚更だ。この人を、恋人という名の所有物になど、したくはなかった。

肩が、ふつ　と軽くなる。

頭を起こした馨さんは僕の手から離れ、代わりに僕の髪に彼女の手が触れた。その手は頭を撫でるわけでも、髪に指を絡ませるわけでもなく、ただ僕の頭に置かれていた。

「一つ、聞かせて」

僕は黙っていた。神に触れていた彼女の指に、ほんの少しだけ力が入る。

「貴方には、私は必要？」

返事の代わりに、彼女の瞳を見つめ返す。声には出さず、心の中で言葉を送ってみる。

僕の瞳を真つ直ぐ見据えていた茶色の眼が、不意に瞬いた。見開かれたその瞳は、僕の肩越しを映していた。彼女の唇から、その人の名前が吐息と一緒に洩れる。

またね、とだけ馨さんに残し、僕はソファから立ち上がった。ロビーの出口で、眼鏡をかけた背の高い男性とすれ違った。会釈をしてきた彼に、僕も目礼を返す。そのまま自転車を転がし、偶然止まっていたエレベーターに乗り込んだ。

明るいエレベーターからガラス越しに降りていく街を眺めながら、僕は下に残してきた二人のことを思った。

馨さんには彼が必要で、彼もまた、彼女を必要として会いに来てい
る。お互いがお互いを求め、満たすために彼らは今夜も静かに抱き
合うのだろう。壁一枚隔てた隣の部屋で眠る、僕のことなど忘れて。

それでよかった

痛みだけを抱えて一人で生きる僕に、彼女の体温は暖かすぎる

扉の開いたエレベーターを抜けて、部屋に続くオレンジ色の電灯が浮かぶロビーを進み、部屋に辿り着いた。

僕を迎えてくれる場所は、どこよりも暗く、冷たく、心地よかった。

Prologue? - Shin (後書き)

プロローグ第二話です。

シンちゃんも、晃斗君に負けず劣らず訳ありでございます。
そして隣人の馨さん、この人もまた面倒くさい人。

次回は馨さんと、訪ねてきた眼鏡さんのお話。

読んでくださってありがとうございます^^

Prologue? - Kaoru (前書き)

【警告】

直接的な描写はありませんが、性的な内容をほのめかす表現がございます。

ものすごく生ぬるいですが、苦手な方はご注意を。

P r o l o g u e ? - K a o r u

P r o l o g u e ? - K a o r u

一日の始まりであるはずなのに、明け方はどうしてこんなに暑いんだろう。

冴えたままの眼を閉じているのが億劫で、目蓋を持ち上げる。カーテンの隙間から差し込む陽光はまだぼんやりとしていたが、眠るのをとくに諦めていた意識を覚ますには充分だった。同時に、まだ感覚を取り戻し切っていない身体に、だんだん熱気が染みていく。

ほぼ衝動的に、薄い掛け布団を引きはがした。耳元で、こもった声が小さく聞こえる。私は寝返りを打って、隣で眠る男の顔にかぶさってしまった布団を肩に掛け直した。満足したように、彼は再び規則正しい寝息をたて始めた。

文字通り目と鼻の先にある彼の寝顔は、腹が立つほど幼い。たった三つの年の差が、否応なく突き付けられる。普段は年齢を感じることもないのに、この男といると、何かと調子が狂ってしまう。取るに足らない、口にするのすら馬鹿馬鹿しいような小さいことが、こぞって見えてきてしまう。

急に寒気がして、私はこみあげてきたくしゃみを慌てて飲み込んだ。音をたてないように鼻をすすり、そつと、腰に触れていた彼の手を動かす。布団から足を抜き、床に脱ぎ捨ててある服を爪先で探った。何も引つ掛からない。私は諦めて、ベッドから起き上がった。

着替えを済ませてから、散らかっていた服を回収する。

彼の靴下やワイシャツ、ネクタイ、それに下着なんかは平気で放り投げてあるのに、ベストとスラックスは、皺にならないように、しっかりと椅子の背にかけてあった。いつものようにスーツ類はそのままに、散乱していた衣類はまとめて椅子の上にたたんでおく。放っておいても文句を言われる訳でもないのだが、部屋に他人の服が脱ぎっぱなしになっているのは、あまり気分のいいものではない。

自分の服を洗濯かごに放り込み、朝食の用意のためにキッチンへ向かった。

いつもはヨーグルトとシリアルで済ましているところを、彼が来たときはちゃんとした食事を作ることにしている。昨日のうちに買っておいた食材を冷蔵庫から取出し下準備をしていると、充電中の携帯電話が鳴った。メールの着信音だったため取りには行かず、そのまま味噌汁用のじゃがいもの皮剥きを続けた。

滅多に自炊などしない私には勿体ないほどのシステムキッチンからは、リビングを挟んでベランダに通ずる窓の外がよく見える。ガラ一枚で隔てられた街は少しずつ眩さを増し、明るい陽光に包まれていく。朝の太陽が昇り切る前にキッチンに立ち、ベッドで眠る男のために朝食を用意する。笑えてくるほどに穏やかな場面。じゃがいもに続いて、玉葱を切りながら、そんなことを思う。

昔は違った

男の身の回りを世話して、ご飯を作って、帰りを待って、同じベッドで甘い夜を過ごす。

そんな生活を軽蔑して、嫌悪していながらどこかで望んでいた。女の幸せなんて信じていなかった私を変えてくれる人が現れるのを、強情を張りながら待っていた。

そんな私にも、寄ってくる男はいた。会社を3つも4つも持っている初老のおじ様が財産を全部くれる、なんて約束してくれたこともあれば、年下のニートやヒモが結婚しよう、なんて言うてくることもあった。

嬉しくなかったと言えば嘘になる。

だけど、今こうしておひとり様ライフを満喫しているのが、彼らに私が出した答えだ。

彼らが欲しがったのは、私という存在じゃなかった。

私じゃなくても、彼らを満たしてやれる女はあぶれるほどいた。

たとえば

たとえば私が男だったら

彼らは私を愛してなんてくれなかった

目の奥が、じんと熱を持った。

瞬きをする、目の際が濡れた。それを拭わず、私はまた玉葱切りを再開した。植物と薬品が混ざったような香りは、仕事場で使っているアロマオイルに似ていた。

「馨」

突然耳元で呼ばれ、包丁を握っていた手と、おまけに呼吸までが止まる。いつのまにかまな板の上で山を作っていた玉葱は、どう見ても二人分以上あった。

「まだ当分できないわよ」

振り返らず、山盛りの具材を、水たっぷりの鍋に移して火を付けた。

すかさず、煙草を持った指が伸びてくる。火がついたラークグリーンの匂いは、野菜の青臭い香りと混ざり、一瞬だけキッチンを満たして消えた。

「今日はゆっくりでよかったのに」

「暑くて目が覚めちゃったのよ」

「そうかな。むしろ寒い気がする」

「シャワー浴びて来たら？」

「あとでいいよ。新聞とってくる」

「今日は休み。昨日の夕刊ならあるけど」

「どこ？」

「テレビのところ。ついでにテレビつけて」

返事の代わりに、やけに切迫した女子アナの声が聞こえてきた。全国に複数のチェーン有名ホテルに、無認可カジノ運営に関わっていた疑いが浮上したという。溶き卵のボウルを抱えながら、振り返って画面を見てみる。ここからそう遠くないホテルが、字幕と一緒に映っていた。

「赤坂のグラン・ホテルじゃない」

私が呟くと、彼も新聞から顔を上げた。

「…本当だ」
「こんな近くでカジノなんてやってたなら、行ってみればよかったな」

日本で暮らして数年経つが、今だにこの国でカジノが御法度である理由がわからない。懸命に走る馬や自転車に罵声を浴びせるよりも、スロットやカードゲームの方がよほど知的に思えるのは私だけなのだろうか。菜箸で卵をかき混ぜながら、私はソファに座る彼の横に並ぶ。煙草の匂いが、煙と一緒に纏わってくる。

「ロスのグラン・ホテルになら行ったことあったけど、あそこはカ
ジノなかったのよ。ベガスが近いからそっちに出してみたいで」
「うん」

「でもアメリカだけで30も展開して世界中にチェーン持てれば、
日本でもやりたくなるでしょうね。日本人は金回りいいから」

「うん」

「ユキ」

「うん？」

「煙草、危ないよ」

そこでようやく、彼は爪の先くらいの長さになった煙草をテーブル
の上の灰皿に置いた。画面を凝視しながら腕を組む彼を残し、私は
キッチンに戻った。卵焼きを焼いてる間、さつきとは打って変わっ
た明るいトーンで、パンダ来日のニュースを伝える女子アナの声が
流れていた。

「昨日、創設記念式をやったホテルなんだ」

五穀ご飯にごま塩を振りかけながら、彼は呟いた。いただきます、と律儀に手を合わせてから、ご飯ではなく味噌汁に箸をつける。多すぎて盛り上がっている玉葱に特に突っこみを入れることもなく、ゆっくりと口に運んで、噛んで、喉を動かして飲み込み、言葉を続ける。

「親父も祖父さんも、まだあそこに泊まってる。テレビで見たかぎり、大騒ぎだろうな」

「いいの？行かなくて」

「秘書からメール来て、早いうちに逃げるって。ヘリでも飛ばすのかもしれない」

「さすがウイングね。お金持ち」

「まったくだよ。去年の決算が黒字だったからって無駄遣いしないでほしいね」

他人事のように言って、ユキはようやくご飯を頼張った。私もそれ以上は続けず、玉葱の盛り上がった味噌汁をすする。具が多いせいか、飲み込むのに喉が狭く思えた。

「食欲ないの？」

やっこのことで一口分通ったところで箸を置くと、ユキがこちらを見ていた。ちよつとね、と答えて私は再び箸をとる。そう、と呟いて、ユキもまた卵焼きをかじる。普段なら遅食いの私にペースを合わせてくれる彼に心配されってしまった

「仕事は、うまくいつてるの」

今日はよく喋るな、と思いつつ、私はまた箸を置いて質問に思考を巡らせる。

「まあまあかな。前よりは繁盛してきてる気はする」

「患者相手に繁盛なんて言ってるいいの」

「いいのよ。そもそも、私は患者だなんて思っていないから」

今度は私が苦笑する番だった。

心療カウンセリングとかメンタルクリニックとか呼称は様々だが、我ながら現代ストレス社会のニーズを的確にとらえたビジネスだと思ふ。

この手の業界は明確な資格や認可が必要ないため、それなりの知識と手腕があれば誰でもカウンセラーと名乗れてしまうのだ。実際うちのクリニックも医師免許を持っているのは院長だけで、私を含めあとのカウンセラーは、治療行為とは見なされない範囲でのカウンセリングを行っている。来訪者の愚痴や世間話、時には妄言にひたすら耳を傾け、話し相手をするのが私の仕事という訳だ。話すだけ話して帰っていく人もいれば、自分のことを人に伝えるのを躊躇いすぎて、話し始めるのに何十分もかかりたり、こっちが何を言ってもだんまり決め込んだままだったりする人もいる。

「タイプは色々だけど、私のところに来る人たちは、大抵が他人との対話を上手にできないだけ。私は、それが病気だなんて思わないし、思いたくもないのよ」

「世間的には、病気に当てはまる症状だとしても？」

「私は医者じゃないから、相手も患者ではない。っていうより、相手が病人だろうがなかるうが、ただのお喋りするにはたいした問題じゃないでしょう」

「ただのお喋り、か」

そう繰り返し、ユキは少し笑う。

彼が笑みをたやさないのはいつも通りで、話の最中に独り言をつぶやくのもいつものことだった。

「不謹慎、って思う？」

そんないつも通りの彼が、今日の私には異様なほど癪に障った。口をついて出た売り言葉に、ユキの笑みが消えた。

「思わないよ。逆にさ」

「逆？」

「的を射てるな、って」

常に穏やかで、どんな皮肉や罵倒にも揺らがない。余裕に満ちたその眼差しは鏡のように、私を映して、突き刺さる。ベッドの中で見せる、あの寝顔と同じ。

私を丸裸にして、晒して、どうしようもなく惨めに堕とす。

「わかってるの」

プライドも恥じらいも引き剥がされた後に残るのは、空っぽな器だけ。

「ただのお喋りなのに、一方は金を払ってでも時間を買って、一方じゃそれを体のいい暇つぶし程度にしか思っていない。ぼったくりもいいところよね。そこらのキャバクラと変わりやしないわ」

勝手に飛び出してくる言葉は、勝手に荒く、強くなっていく。

玉葱を刻んでいるわけでもないのに、鼻腔の奥が厚い。

「傍から見ればくだらない会話ばかりよ。社会批判や人間関係の愚痴なんてまだいい方。明らかな童貞が彼女でつち上げてセックスがうまくできないだとか、ウリしまくってるビッチ女が、捨てた男にストーカーされて金せびられてるとか。そんな馬鹿馬鹿しい話をしに来る人たちから、金巻き上げて、相槌打っただけで何の貢献もしない。そんな仕事に満足してる私が一番馬鹿馬鹿しいんだって、わかってるわよ」

「馨」

「バカなのはお互い様。何の資格もないにわかカウンセラーに高い

金払って愚痴りに来るあの人たちも、彼らに頼られてるなんて思いあがってる私も。医者と患者なんかじゃない。信頼も何もない、ただの利害関係よ。それでも」

「馨」

彼が呼んだ名前が耳に届いたのと同時に、額に冷たい指先が触れ、視界に影が差す。

「嬉しいのよ。私のところに来てくれるだけで」

「熱、あるね」

自分の手にも額を当てて、ユキは呆れたように笑って言った。

「なんで言わないの。自分でわかってたんだろ」

「だって」

途端に気が抜けて、体中が一気に重くなっていく。答える前に、ユキは立ち上がって私の手を引き、寝室へと連れて行った。一人で歩くと言おうとした時には、すでにベッドに座らされていた。

「着替える？」

抵抗するまもなく私を横たわらせたユキは、ベッドの脇にしゃがんでもう一度額に手を当ててくる。枕に沈んだ頭を振って、目を瞑る。冷たかった掌は、熱が移って溶けるように肌に染みてくる。

「ユキ」

「ん？」

「ごめんね」

返事はなく、代わりに額の少し上に、唇が触れる。額にあった掌は、そのままゆっくりと私の髪を撫でる。

「昨日のさ」

「うん」

「銀髪の彼、あれがシンちゃん？」

意外な名前に、薄く瞼を開く。

「会ったの初めてだっけ」

「話には出てきてたけどね。最初女の子だと思ったよ」

「細いでしょ、あの子。ちゃんとご飯食べてるのかしら」

「気になるの」

相変わらず余裕に満ちているその顔に、指を伸ばした。弧を描く、薄い唇に触る。

「怒った？」

「怒らないよ。自業自得だし」

「わかってるじゃない」

ぼやけていた視界が暗くなり、呼吸がふさがれた。

狡い男

そうやって甘えられると、放っておけなくなる

一瞬で離れた唇の名残を味わいながら、再び目を閉じ、微睡に意識を委ねた。

Prologue? - Kaoru (後書き)

この二人は恋人じゃないし、ただのセフレでもないっていう設定にしています。

恋愛感情はなくても、抱いて、抱かれることはできる関係、というか……難しい！

こういう関係の男女がどんな風に映るかは読み手の方それぞれだと思っんで、ご自由に解釈してくださいませ。

次はユキさん、年下の女の子と密会！？の話です。

ありがとうございました！

Prologue? - Yuki

Eclipse Prologue? Yuki

改札口で名前と事情を告げ、駅員に事務所まで案内してもらった。

事務所はホームや売店からかなり離れた、構内の隅にこぢんまりと構えてあった。

「どうぞ」

促されて入った部屋は、冷房で寒いくらいだった。

入ってすぐのドアの横に駅員用のデスクがあり、備え付けの椅子にはまだ若い駅員が座っていた。その奥には二組のソファが、ちゃぶ台のようなテーブルを挟むように置かれていた。

ソファに腰を降ろさず立ったままだった責任者らしき年配の駅員が、ご足労いただきすみません、と俺に会釈する。そのすぐ横のソファには顎に絆創膏を貼ったワイシャツ姿の中年の男性が座っており、腰の辺りをそわそわと触りながら、探るように俺の方を見ている。

その向かいに、こちらに背を向けるように座っている方の子は、俺が入ったことに気付いていながら、こちらを見ようとはしなかった。

「ルナちゃん」

呼びかけると、明らかな不機嫌顔がようやく俺の方に向いた。

何か言おうとした彼女を遮り、俺は年配の駅員にご迷惑をおかけしました、と謝罪する。少し間があいてから、すみませんでした、と彼女も呟いた。横目に見ると、彼女は頭を下げることなく、正面の中年男を睨みつけていた。

「お電話でもお話ししましたが、まあ目撃情報からしても、そちらのお嬢さんに非がないことは明白ですし、負傷者もいませんからね。警察の方にはもう調書はとってもらいましたし、一応お迎えに来てもらったけなで」

空気を読んでか読まずか淡々と言う年配の駅員は、長年の経験の中でこうしたトラブルにも慣れっこのようだった。暗にもう帰っていない、というメッセージを読み取り、俺はソファに座ったままの彼女を行こう、と促す。

最後にもう一度お世話になりました、と声をかけ、薄暗い事務所を出た。俺のあとから出てきた彼女が閉めたドアの音は、壁が崩れたかと思うほど大きく響いた。

「ごめんね。 征景さん」

ルミネエストを通り抜け外に出てから、それまで黙っていた彼女が口を開いた。

「一人で帰るって言ったんだけど、あの駅員のおじさんが聞いてくれなくて」

「いいって。最初電話で聞いたときはびっくりしたけど、ルナちゃんに怪我がなくてよかったよ」

「すごく大げさに言うんだもん、あの人。階段から突き落とされたなんて言ったら、誰でも誤解するのに」

「普通階段から突き落とされて無傷な人ってあまりいないと思うけどな」

「人を階段から突き落としておいて、自分もバランス崩して怪我するって人も普通じゃないよね」

「それにしてもルナちゃん、なんで突き落とされそうになんてなったの？」

「もともと電車の中で、ヘッドホンの音漏れがうるさいって因縁つけられてたの」

さりげなく振った話題を疑いもなくキャッチし、彼女は話し始めた。

「私のは音漏れ防止機能ついてるから違うって言ったら、大音量でうるさいロクなんか聴くなつて食ってかかって来たの。その時私が聴いてたのはエヴァンスの「枯葉」だったから、印籠みたいにウオークマンの画面を見せてやったんだ。そしたら何も言わないまま隣の車両に行っちゃったからそのまま放っておいた。それで、新宿に着いてホームで飲み物買ってから階段を降りようとしたら、いきなりどんって」

「それって、そのヘッドホンの件のあとから君の行動をずっと見てたってことだよな」

「気持ち悪いでしょう。ねちっこいというか、根に持ちすぎ」

「それでも、まさかルナちゃんが運動神経抜群で、階段でバク転しちゃうような女の子だとは思わなかっただろうな」

「周りの人なんて拍手してたよ。こっちはびっくりして頭真っ白だ

ったけど」

そこで彼女は、ようやく今日初めての笑みを見せた。

下手をすれば殺されかけた後で、微塵も恐怖感を見せないそのタフさには恐れ入る。血筋といえば血筋だが、だがその凜とした佇まいの影に潜む彼女なりの思いを知る身としては、拍手など贈れる気にはなれない。代わりに、お腹すいてない？と俺は彼女に尋ねた。今のところ俺が彼女にしてあげられることは、せいぜい兄貴風を吹かせてうまい飯を奢ってやるぐらいだ。

「今の時間ならまだどこも混んでいないだろうし、お腹すいてなければお茶するだけでもいいしさ」

「それならご飯は軽めでいいから、学生が行かないようなお店がいいな」

「西口の展望レストランとか？」

「違うよ。高級とかじゃなくて、グルメサイトとか情報誌に載ってないような、知る人ぞ知るっていう感じのお店に行ってみたいんだ」

「軽めに食べられて高級じゃなくて、知る人ぞ知る店、か。了解」

かなりご無沙汰だったが、思い当たる店が一件浮かんできた。三丁目方面に向かっていたのを右折し、甲州街道の方へ脚を向ける。

「いいところ知ってるの？」

「個人的には好きな店だけど、ルナちゃんみたいな若い子が気に入るかな」

「征景さんだって若いでしょう」

お世辞には聞こえなかったが、十代の女の子に言われても全く説得力がない。

「俺はもうおっさんだよ。四捨五入して三十だし」

「嫌な喻えだね」

そんな雑談をしているうちに、程なく目的の店の前に辿り着いた。

昼は喫茶店、夕方以降はバーを営む「ルーチェ」は、新宿駅の東南口から甲州街道沿いに御苑方面へ十分ほど歩いてからさらに道一本入った、目立たない路地にひっそりと建っている。

お世辞にも華やかとは言えないが、蔦の絡んだ煉瓦造りの壁に木製のドアと、なかなか粋な外装をしている。一步踏み入れれば、オレンジ色の灯りに照らされたカウンターと、その奥には百を超えるボトルが並んだ棚、そしてカウンターと対の壁際には四組のテーブル席が目に入る。店内のところに飾られたアンティーク調の絵画やインテリアは、マスターの古典趣味の賜物だ。

カラン、とレトロな鈴の音に迎えられて入った店内には、昼前にもかかわらず客の姿はなかった。若い男が一人、ブルースをお供にカウンター内で新聞を読んでいる。俺たちに気付くと顔をあげ、いらっしやいとだけ呟きまた新聞に目を戻す。何度か見たことのある顔だった。マスターが唯一雇っている従業員のはずだ。

「シュウさんは？」

「買付けっす。夕方までには戻るって」

新聞から目を離さないまま、彼はまた呟くように答える。もの珍しそうに店内を見回しているルナちゃんをカウンター席に促し、自分もスツールに腰かけた。

ホットコーヒーを二つと、ルナちゃんが選んだフレンチトーストを注文する。新聞とにらめっこをしていた彼は意外にもすばやく立ち上がり、カウンターの奥にあるロースターでコーヒー豆を挽き始めた。

「このコーヒーは注文してから豆を挽いて、落としてくれるんだ」
「ドリップ用の器具って実物見るの初めて。なんかかっこいいね」

昭和を思わせる空間と異国情緒が混在した雰囲気が入ったのだろつ。コーヒーが届くまでの間、彼女は飽きることなく、ステンド

グラス調のランプや黒塗りの花瓶を眺めていた。

「こういうお洒落なお店って大学入ったらどんどん見つけれられると思ってたけど、いざ入ろうとするとやっぱり敷居が高いんだよね。入口見ただけで終わっちゃう」

ブラックのコーヒーを少しずつ口にしながら、ルナちゃんは今どきの女子大生事情を語ってくれる。

「そもそも自分でお弁当とかご飯作る方が節約になるから、最近はほとんど外食してないの。一人暮らしってたでさえお金飛んでっちゃうから」

「学生が全部自分で賄うのはキツイよ。大学行ってバイトして、ご飯も自分で作ってで、ちゃんと寝られてる？」

「征景さんこそ、忙しくてお家帰ってないんじゃないの？なのにあんなくだらないことで呼び出しちゃって」

「いいって。どうせ会社に顔出すつもりだったんだ」

「でも、彼女さん置いてきちゃったんでしょ？」

「彼女？」

「指輪、してないから」

咄嗟に、左手に目をやる。それからベストの胸ポケットを探った。布越しにリングの感触があり、思わず深く息を吐いた。

「やっぱり」

ルナちゃんの言葉にも、溜息が混じっていた。

「征景さんが指輪してないときは、女の人の匂いにするんだよ」

「…本当に？」

「うそ。なんとなく」

「…まいったな」

降参した俺に、ルナちゃんは口の端だけでくすつと笑う。女の勘ほど侮れないものはない。

「そういう詞の曲があるの。二人でいるときは薬指の指輪を外して、
っていう歌が」

下手な弁解はせず、そうなんだ、とだけ応えた。男の言い訳ほど聞き苦しいものもない。

「軽蔑する？」

コーヒーで喉を潤してから出来る限り平静を装って訊ねる。同じようにコーヒーを一口飲んでから、彼女は首を横に振った。

しばらく、子守唄のようなスローテンポのブルースと、カウンター内からの料理の音だけが響いた。ルナちゃんは、飲みかけのコーヒーカープの縁を指で撫でるように弄っている。アルトサクスのメロディーに合わせて、時間までもがゆっくりと流れているようだった。

呼吸とともに、一秒一秒が過ぎていく。

こんな時間ですらも、嫌いになれない

「一個だけ聞いていい？」

沈黙を破ったのは、いつの間にかこちらを向いていたルナちゃんだった。

「もう、忘れられたの？」

何を、と彼女は言わなかったし、俺も聞き返さなかった。彼女の心を知るには、その一言で十分だった。

「忘れないよ」

ポケットから取り出した指輪を、薬指にはめる。色あせかけたシルバーが、オレンジ色のランプの灯りを受けて小さく光った。

「こんなものがなくても俺は彼女を忘れたりしないし、なかったことになんて絶対できない」

薬指のリングが変わらない想いの証なのだとしたら、俺はこの指輪を外すべきなのかもしれない。

「あの人は、全部知ってる。あの人に会うときは、これ見よがしにつけておく必要なんてないんだ」

俺にとって、この指輪は記憶だった。

短い間だったとしても、一人の女を心底愛し、共に生きた証。

すでに思い出となってしまった日々を、消えない傷とともに刻み込む存在。

言葉もかけずに残してきてしまった、何も知らずに眠っているであろうひとを想う。

記憶という名の戒めは、俺を救ってくれたあの人までも傷つける

「多分、死ぬまで忘れることなんてできないんだよ」

それまでじつと俺を見つめていたルナちゃんの目が、大きく瞬いた。すっかり温くなった、最後の一口のコーヒーを飲み干す。冷めてもキレはそのままだったが、水分を欲していた喉が余計に渴いた気がした。

「何かのきっかけで、痛みはなくなって吹っ切れることはあるかもしれない。だけど、記憶がなくならない限り、消し去ることは不可能だ。どうしようもないんだよ」

「それでも、忘れなきゃダメなんだよ」

今度は俺が瞬きする番だった。彼女の声にはまるで感情がなく、冷え込でいた。

「忘れようとしなきゃ、いつまでたっても縛られたままなんだよ？」
「それでも、できないよ」

温度のない彼女の言葉を、俺は強く遮った。ルナちゃんの表情までもが、一瞬にして凍りつく。

「大切だった人を忘れなきゃいけないなんて、本気で思ってる？」

耳に届いた自分の声は、彼女に負けず劣らず冷たかった。酷な問いだとはわかっていたが、これ以上彼女に目をそらさせる訳にはいかなかった。

ルナちゃんは黙ったまま、睨むようにしてこちらを見据えている。と言っても、全く恐怖は感じない。彼女が今本当に見ているのは、俺ではない別の誰かのはずだ。俺も黙ったまま、そんな彼女を見つめる。再び、奇妙な沈黙が訪れた。

「お待ち」

低い声が聞こえ振り向くと、カウンターの青年がフレンチトーストのプレートでルナちゃんの前に出すところだった。ほぼ間を置かずに、ズボンのポケットから携帯電話のメールの着信音が響く。休日出勤をしている社員からだった。内容にざっと目を通し、横のストールにかけておいたスーツの上着を羽織る。

「ごめん。会社から呼び出しがかかったから行くね。お代はこれで。」

好きなもの食べていいから」

すっかり目つきが戻りぽかんとしている彼女に五千円札を握らせ、アタッシユケースを持ち席を立った。

「ごちそうさま。マスターによろしく」

彼女に名前を呼ばれた気がしたが、振り返らずに走って店を出た。

すべてが集まり、回って、出て行っただと思えばまた集まる。夏の終わりの穏やかな土曜の昼すぎだろうが、この街は呼吸を止めず、回り続けている。

そんな忙しない街が、俺は嫌いじゃない。

東南口前の階段を上り人で埋まった歩道を通り抜け、ルミネワン前の交差点に出た。

幸いすぐに信号が青に変わって、人だかりが一齐に動き出し、混ざり合った。行き交う人波を横目に、俺は横断歩道から少し外れた車道走り抜け、甲州街道から一本入った細道に行く。副都心の代名詞ともいえる東京都庁舎や高層ビル群に繋がっているこの通りは、比較的広い道幅の割には大通りに比べて格段に人が少ない。昼すぎということもあり、飲食店やカラオケのキャッチもほとんどいない。

無意識に、歩調が速くなる。正面に立つビルを見据えながら、俺はひたすらに脚を動かし続けた。

街は嫌いじゃないし、人混みも嫌いじゃない。

それでも、歩調を緩めたり、歩みを止めて街を見渡したりすることはない。

街の呼吸を聴くには、街と同じように動き続けることが一番だ。

少しでも気を抜くと、腹に刻まれた烙印が疼く。

忘れるなと
背を向けるな、と

いつ絶えるかもわからない呼吸を当たり前のように信じて、感じ
なくなつて、存在すら忘れた時

街と一緒に、俺もまた壊れるのだろう

無駄なあがきだとしても、歩いていたかった。

進むことはできなくても、足を止めない限り、大事なものを見失わ
ずに済む。

何より…

「わあっ!!」

膝の辺りから聞こえた声に、反射的に下を見た。

一瞬遅れて、足元に軽い衝撃が走る。道路に座り込んだ2、3歳の女の子が、額を抑えながら上目づかいに俺を見上げていた。

続いて前方から、ベビーカーを押しながらすみせんと叫ぶ女性が始めてくる。秋口だというのにノースリーブのロングワンピースをはためかせながら、ピンヒールのサンダルで懸命に走ってくる。ショップ店員並みに髪型もファッションも決めていながら、しつかりメイクが施されたその顔は、紛れもなく母親の表情をしていた。

零れそうになった苦笑を飲み込んで、俺は涙を溜めた瞳で見上げる女の子の前にしゃがみ込み、その小さな頭を軽く撫でた。

「ごめんね。どこか痛い？」

何が起きたのかを懸命に理解しようとしているらしく、女の子は何も言わないまま、俺を見つめたままにいる。地面にへたり込んでいるままの彼女を立たせて、服の汚れを払いながら怪我がないかを確認する。見たところ、特にすりむいてなどはいないようだった。

「すいませんでしたー。大丈夫ですか」

到着した母親が女の子を抱き上げ、しきりに頭を下げた。抱きかけられながら、女の子はまだ俺の方を眺めたままだった。もう一度頭を撫で、バイバイと手を振ってから母親に会釈し、その場をあとにしてまた走る。

女の子のせきを切ったような泣き声を、背中越しに聞いた。

Prologue? - Yuki (後書き)

ゆきさんのお名前、読み方は「ゆきひろ」です。漢和辞典で調べました。

この男もまた面倒な人です。奥さんに対してと馨さんに対しての感情は全く違うのに、彼にとってはどちらも「愛している」になるみたいですよ。的な。

次回はルナちゃんと、謎の青年の絡みでございませう。

ありがとうございました！

Prologue? - Luna

prologue? - Luna

夢を、見ていた。

知らない街を、思いっきり駆け回っていた。

空も太陽も手の届きそうな程に近く、身体を突き抜けていく風が絡まり、解けていく。

街には誰もいない。

人も、乗り物も、鳥も、お店の広告パネルすらも、私以外に動いているものは何一つなかった。

ずっと全速力で走っていても、呼吸の乱れどころか、上昇しっぱなしなはずの熱も、たまっていくはずの疲れも、心臓の動悸すらなかった。

私を邪魔するものは、何もなかった。

いつの間にかアスファルトの道路が、芝生の敷き詰められた広場に変わっていた。綺麗に手入れされた緑色の中を、前だけを見据えて駆け抜ける。無機質な街並みは消え、空の青と芝生の緑だけが、遠くまで広がっていた。走っても走っても、呼吸も、世界も、全部がずっと続いていく気がした。

不意に、芝生が視界から消えて、周りが青一色に染まった。柔らかな地面は足元から消え、身体は宙に投げ出されていた。

落ちている

思う前に、スカイダイビングみたいに、手足を広げていた。翼なんてなくても飛んでいるような、そんな錯覚だった。

このままずっと落ち続けたら

いつ重力すらもなくなって

何にもとらわれないで

そして

「起きた」

引き戻された意識の中で、誰かが呟いたのが聞こえた。

重い瞼を何度か瞬かせても、視界には何も映らない。醒めようとして脳を働かせ、自分がカウンターに突っ伏していることに気付いて頭を持ち上げた。

目が覚めてきても、周りの薄暗さは変わらなかった。また少し考え、風景さんに連れてきた喫茶店だと思い出す。途端に、巻き戻すように次々と記憶が戻ってきた。

数秒前までの眠気を振り切り、辺りを見回す。カウンターと反対側に向けた椅子に、いかにもくつろいでいるように脚を組みながら座った男の人が、煙草をふかしていた。

「今の状況、わかるか」

完全にオフモードのつもりらしく、愛想も何もない聞き方だった。尋問されているような気分になり、私は声を出さず頷く。

「ならいい」

短く言ってもう一度煙草をふかすと彼は立ち上がり、私の後ろを通ってカウンターの中へ戻った。

何がいいのかわからないまま、再び周りを見渡してみる。ランプや照明は全部消えており、窓から差す外からの薄い光だけが唯一の明かりだった。壁際のテーブル席は、掃除をしたあとのように椅子がテーブルに乗せられている。出入口のドアの近くには、来るときに見かけた木造の看板が店内にしまわれていた。

最後に携帯電話で時刻を確認したところで、先刻の確信が間違いではなかったことをはつきり悟った。お金を払う側とは言え、今の私はただの迷惑な邪魔者だ。

「すいませんでした。ごちそうさま」

なるべく彼の顔を見ないようにしながら足元に置いておいたリュックをひつつかみ、椅子から飛び降りるようにして出口へ向かった。脚がうまく動かず、床の板の継ぎ目にひっかかりそうになった。

「ちょっと待った」

出口のドアに手をかけて引こうとしたまさにその時、後ろから呼び止められ脚を止めた。振り向くと、例の彼がカウンターから何かを差し出すように、手をのばしていた。何かを持っている。暗さでよく見えず、目を凝らした。

「お釣り」

彼の指先でひらひらと揺れているのは、一枚のお札だった。反射的にポケットを探ってリュックから財布を取り出して中身確かめるどこにもない。同時に、どこかにしまった記憶もなかった。彼が持っているのは、間違いなく征景さんにもらったはずの五千円札だった。

「テーブルに置きっぱなしのまま寝ちまったから、預かつといた」

自分の間抜けさが、ほんとと嫌になった。

現金を放置したまま爆睡する客など、彼もそうは見えたことないだろう。この際顔を覚えられるであろうことは諦めて、先刻勢いよくあとにしたカウンターへ戻った。

すでに計算してくれていたらしく、すぐにお札数枚と五百円玉を手

渡された。小走りで出口へ向かいながら、ろくに確かめもせず財布に突っ込んだ。

一刻も早くこの場から去ろうと、勢いをつけて重い扉を引き開けた。だが、そこで待っていたのは、思いがけない光景だった。もはや何かの嫌がらせとしか思えないまま、私は溜め息とともに木のドアを閉めた。こうなったら、他に選択肢はなかった。

「あの、傘ってお借りできませんか」
「やっぱ降ってたか」

知ってたなら教えて欲しかったが、ただでさえ薄暗い店内から窓の外の様子を知るのは、位置的にも難しい。先刻座った席に再び腰掛けると、それがよくわかった。文句を言うべき相手は彼ではなく、雨の心配はないと言い切っていたお天気キャスターだ。

「ちょい待ってて」

カウンター内で何かの作業をしてから、いったんパーティションで区切った奥のスペースに引っ込み、すぐに出てきて傘を手渡してくれる。意外にも紺地に白のドット柄の、可愛い傘だった。お客さん

の忘れ物なのだろう。そこには触れず、ありがとございます、とお礼だけを言った。

「あと、これ」

カウンター越しに出てきたのは、白とコーヒー色の層に分かれたカフェオレだった。

「喉渴いてると思って」

言われてみれば、征景さんが頼んでくれたホットコーヒーは、全部飲めずに残してしまっていた。しかも口を開けて寝ていたらしく、喉の奥に何かが絡まっているような違和感がある。

つまり口が半開きの間抜けな寝顔をすっかり見られてしまったというのだが、それ以前に散々醜態を晒していたためはや恥ずかしいという気持ちすら起きなかった。

「えつと、いくらですか」

「いいよ。サービス」

財布を取り出そうとしたところで、遮られる。その目には威圧感にすら似た強さがあり、声を出すタイミングを完全に逃してしまった。特に断る理由もないので、ありがたくいただくことにする。

「いろいろありがとうございます。傘、近いうちに返しに来ます」

頭を下げると、それまでポーカーフェイスだった彼が、唇の端を少しだけ上げて笑った。

黒のシャツに、わざとなのか天然なのか無造作な黒髪、おまけにこちらも剃り残しなのか自然にかわらないような無精髭というただでさえ年齢不詳な出で立ちだったのが、ベテラン俳優のような余裕に満ちた笑みを見せられて、余計にわからなくなる。

そんなことを考えながら今度こそ出口に向かおうとすると、突然何かが落ちてきたような音が響き、続いて軽い揺れが床を伝って届いた。地震かと思ったが、揺れは一瞬ですでに収まっている。代わりに、先刻の音よりさらに大きな、誰かの怒声が聞こえてきた。

「晃斗！！手伝わってのが聞こえねえのか！」

空気が裂けるような大声だった。黒服の彼が、やれやれと言うように肩を落とす。そして、奥のスペースに向かって声を張り上げて叫んだ。

「うるせえんだよクソオヤジ！！客いるんだから静かにしやがれ！」

とてもではないが、つい数秒前までの落ち着きに満ちた彼とは別人だった。私の視線に気づいてこちらに向いた顔は、呆れと苛立ちが混ざっている。

「あー、早く帰った方がいいよ。雨凄くなってるし」

「あの、さっきのは」

「気にしないでくれ。ただの」

頭を掻きながら彼が続けようとした言葉は、再び大きな音でかき消された。

「何が客だ。まだ7時前じゃ……」

壊れんばかりに強く開け放たれたドアから、40代ぐらいの男の人

が、怒鳴り声とともに入って来た。背はあまり大きくないが、声に
違わず体格はがっしりとしていて、格闘技のコーチでもやっていそ
うな人だ。その怖そうな中年の男性が、私を見てみるみる声のトーン
を落としていく様子は、私の思考を一時停止させるには充分だった。

「だから言ってんだろ」

店員の彼が言っで、中年男性の方にタオルを投げる。私の前を飛んだそれを難なくキャッチし、男性は雨に濡れた頭を拭きながら、力
ウンター内に入った。

「客がいるんならCLOSEなんて出してくんじゃねえよ。紛らわ
しいんだよ」

「わかったわかった。開けりゃいいんだろ」

「なんだその返事は」

ゴツン と鈍い音と、痛えなという悪態が続けざまに響く。漫才の
ようなやりとりののち、黒服の彼は頭をさすりながら奥へと入って
いった。

「晃斗！裏口んところの荷物地下に運んどいてくれ」

「これ全部かよ」

「悪いね、騒がしくて。どうぞ、座って座って」

嘆きにも似た声を軽く無視し、マスターらしき男性はにこやかに席を勧めてくれる。私はどうも、と先刻の一つ隣の椅子に座った。もはや帰る気などとつくになくなっていた。

「多分夕立だからすぐやむだろうけど、せっかくだからゆっくりしていきな」

そう言つてカウンターに出してくれたメニューは、昼間のとは違うバートタイム用のものだった。

名前を聞いたことはあつても、色も味も分からないお酒ばかりが並んでいる。説明書きはもちろん、値段も書かれていない。迂闊に注文しようものなら、今週分の食費が一気に吹っ飛んでしまうなんてこともあり得る。

先刻もらつたカフェオレを飲みながらメニューを眺めていると、横から別のメニューが差し出された。見ると、いつの間にか戻っていた若い方の店員の彼が、すぐ傍に立っていた。

「ディナーメニューもあるんで、よかつたら」

一言だけ残し、再び奥の方へ去っていく。カウンター越しではわからなかったが、その後ろ姿は細身の割に背が高く、シャツだけでなくパンツも、腰のサロンも黒で統一されていた。

ディナー用のメニューはおつまみのような軽食が中心だったが、肉や魚料理などのメインディッシュもあった。何度もページを行ったり来たりしながら、バケット付きのバジル風味サラダに決める。一番お手頃なものを選んだつもりだったが、それでも先刻のホットコーヒーの二杯分の値段だった。

マスターが用意してくれる料理の音に耳を傾けていると、ピアノと続いてアルトサククス、ベース、最後にドラムのリズムが混ざり、静かなブルースが流れてきた。薄暗く程よく閉じられたこの空間で、哀愁たつぷりのメロディーは酔わせるように響く。

彼も、ブルースが好きだった。

ほとんど飲んでしまったアイスオレは、溶けた氷で肌に近い色に薄まっていた。ストローで、最後の一口を口を含む。水とミルクに混ざった微かなエスプレッソの味が、口の中に広がりすぐ消えた。

彼が残していった山ほどのCDは、今はもう部屋にはない。服も、本も、開けたばかりだったワインも、全部処分した。

目に見えない思い出だけが、私の中にいつまでも居座っている。

もう二度と、何にも捕らわれたくなんてないのに

「お嬢さん」

「はい！」

トリップしていた思考が急に引き戻され、必要以上の大声が出てしまった。

「飲み物空だけど、何かいる？」

丸くなった氷だけが残っていたカップを下げながら、マスターが尋ねてくる。感慨に耽っていた脳を何とか働かせ、今はいいと伝えた。節約に越したことはない。

「アルコールがダメなら、ノンアルコールカクテルとかソフトドリンクも出せるよ」

「実はそんなに手持ちがなくて。あんまり出せないんです」

「お嬢さん、学生？」

「はい。独り暮らしなんでもいろいろやりくりしないと厳しくて」

「確かに、独り暮らしの女子大生さんにはウチみたいな店は優しくないかもなあ」

料理の手を止めず、かつきちんと私の方に目を向けながら、マスターは話を聞いてくれる。いちいちレシピを確認しながら手を動かさなければならぬ私とは大違い。

「普段なら外食って気が引けちゃうんですけど、今日はたまたま從兄に連れてきてもらったんです」

「從兄か。何て言う人？」

「黒羽です。黒羽征景」

記憶をたどるように少し空を見たあと、マスターはああ、と呟く。

「知ってます？」

「知ってる知ってる。前はよく来てたんだけど、ここ半年くらい見てないな。元気にしてる？」

はい、とだけ応えて、意図的に目を背けた。マスターも何か悟ってくれたらしく、調理の方に集中し始めた。

あの日のことを口にするには、何もかもが足りなさすぎる

「やっぱり、飲み物もらっていいですか」

申し出た私に、マスターは少し笑って頷き、メニューを渡してくれる。先刻の会話のせいか、アルコールのメニューは抜き取られていた。

バジルのサラダと、マスターがおまかせで作ってくれたノンアルコールのカクテルは、値段に違わずおいしかった。ツケでもいいと言ってくれたマスターの親切を遠慮し、なぜか財布に取っておいてあった二千円札で代金を払う。ツケでの支払いなんて、フィクションの中でしか聞いたことがない。現実にあつたとしても、とても自分が見えようなやり方ではない。そういうと、マスターは何がツボに入っただのか、ひとしきり笑った。

「面白い娘だね。また好きな時においで」

「今度はちゃんとお金持つてきます」

「いいって。お嬢さんになら、いくらでもサービスするよ」

「エロオヤジが」

小さく呟いたのは、カウンターの向こうでカクテル用の氷を作っていた、黒服の彼だった。ほぼ間が空かず、ゴツン とまたあの鈍い音がする。

「痛えよ。すぐ殴るなっつってんだろ」

「てめえが余計な口叩くからだろっが」

「じゃあ、ごちそうさまでした」

若い方の彼がマスターに言い返す前に、私は少し大きめに声をかけた。どつき合っている二人を見るのは退屈しなかったが、一日に四回も見ればさすがに新鮮味もなくなる。

「ああちよつと待った。晃斗、このお嬢さんを送ってきてあげな」

マスターに命じられた彼は、露骨に面倒そうな顔をする。と言っても眉と眉間が少し動いたただけだったが、普段が仏頂面な分わかりやすい。

「はあ？店どうすんだよ」

「これぐらい俺一人でも回せるさ。ついでに煙草買ってきてくれ」

あれから何組かのお客さんが出入りしていたものの、今は私以外にフロアのテーブル席にカップルが一組と、壁際のカウンター席で黙々と飲んでいる初老の男性がいるだけだった。どちらも先刻から注文をせず、それぞれの時間と空間を楽しんでいる。

「もうストックねえのかよ」

「文句あるならおまえが禁煙しろ」

「あの、大丈夫ですよ。家かなり近いし」

断ろうとした時には、すでに彼はカウンターから出ていた。サロンをとりて、行かないのかと言うようにこちらを見ている。

マスターに会釈し、半日ぶりの外へと向かった。何時間か前には重かった足取りは、別物みたいに軽くなっていた。

すっかり雲のない夜空は、眠らない街に溢れる光に照らされて晴れ渡っている。昼間よりも賑やかな飲食店街を抜けた人通りの少なくなった細道を、一步一步ゆっくり歩く。何メートルも離れていない後ろには、夜に溶け込むような黒に身を包んだ彼が、私の歩幅に合わせながらついてくる。微かに聞こえる雑踏は、別の世界から響いてくるように遠い。

店を出てから、私たちは一言も言葉を交わしていなかった。沈黙している気まずさも緊張感もなく、男の人と歩いているという高揚すらもない。ただ、一人ではないんだという、訳もない安心感だけが、私の中でふわふわと漂っていた。

甲州街道に出て、道と空が同時に開けた。高層ビルが乱立する副都心からも、広い空は見える。雨のあとで湿った風が、身体に絡まるように吹き抜けていく。

「ここで大丈夫」

振り向いて言うと、彼は足を止めて頷いた。いつの間にか、煙草を口に啜えている。

「今日はありがとう。楽しかった」

啜え煙草のまま、彼またあの笑みを見せる。風に吹かれて、紫煙が白くたなびく。

「また行ってもいい？」

今度は、声をだしてああ、と返事をくれた。

馬鹿丁寧な決まり文句や媚に満ちたリップサービスなんかよりも、その短くて無愛想な返事が、なんだか嬉しかった。

「気を付けてな」

「はい。じゃあ」

手を振って、広い道路沿いの歩道を歩いた。少し進んで振り向くと、彼は煙草をふかしながらまだそこにいた。もう一度手を振ると、彼も小さく手を上げて、元来た道へ戻った。

彼の姿がなくなったのを確認したところで、私は目の前に真っ直ぐ伸びる道を、リュックを背負い直し走り出した。

すぐに呼吸が上がり、心臓が波打ち、身体中が熱くなる。

ヒートアップしていく身体に比例するように、頭の中に、いくつもの映像が巡る。

回る視界

狭い事務室

人とコンクリートが溢れる街

薄暗くて、静かで、暖かい店

私を諭した、征景さんの哀しい目

私を歓迎してくれたマスターの目

私をずっと見ていた、彼の真っ直ぐな目

いつまでも消えてくれない、いつの間にか消えてしまったあの人

走っても走っても、振りほどくことなんてできない

ただ、前に進みたいだけなのに

誰もいない部屋に辿り着くまで、私は一度も止まることなく走り続けた。

信号も、段差も、階段も、柵も、壁も、全部越えた。

遮るものなんて、何もなかった。

P r o l o g u e ? - L u n a (後書き)

以上でプロローグ終了です。次回より本編入ります。

アングラやらアクションやらまたごちゃごちゃした人間関係やらいろいろ出てきます。

ありがとうございました！

1 JET (前書き)

本編スタートです

1、JET

Eclipse 1 - ? JET

米国大手メーカー“レオン”が全世界約7万人の顧客情報を流出させたと発表した件で、米国防総省捜査局は、未確認高性能ウイルスによるサイバー攻撃の可能性を指摘。当局は国際ハッカー集団によるサイバーテロの可能性を視野に入れて捜査中。…ウィンストン会長「被害者には私のすべてをかけて謝罪したい」とのコメントを発表、会長職辞任の声も。…

新宿通りを挟んだ駅前広場は、平日の昼間らしく今日も中途半端に人が溢れていた。

アルタの大画面に流れるテロップは、文字が小さいうえにすぐ消えてしまい、まともに読めたものではない。音声なしで喋っているスリー姿のキャスターの口の動きから、かろうじて内容が判断できる有様だ。と言つても、ここから半径20メートル以内でニュースを理解している奴はおるか、スクリーンに視線を向けている奴は俺以

外にいないように思えた。真昼間からこんなところで油を売っているような人間には、サイバーテロになど興味はないのだろう。

煙草と排気ガスの臭いが充満した広場から眺める街は、まったく変わらないうで、それなりに変化しつつある。少し前までは背広を抱えながら汗だくで歩いてたサラリーマンたちは、相変わらず足取りは重そうなものの、ダークカラーのスーツ姿に戻っている。狭い歩道に並んでだらだら歩く若者の集団の手からはうちわや飲み物に代わり、携帯電話が収まっている。と言っても、この無秩序な街には統一感などあるはずもない。ノースリーブにビーチサンダルの若者もいれば、全身ゼブラ柄のスーツに革製のブーツで決めている女もいた。

一ヶ所に焦点を絞らず視界に映る景色を眺めていると、自分が移り行く全てを見渡しているような、世界の傍観者にでもなっているような錯覚に陥る。何もかもが絶えず動き続けている街のど真ん中で、秋の日にあたりながら煙草をふかせるのは、時間が有り余っているはみ出し者の特権だ。時計を気にせず人目を気にせず、太陽が周っていくのを感じながら過ごす昼下がりには、清々しいほど退屈に流れていく。日射しとニコチンでぼんやりとした思考を軽い眠気に泳がせ、重くなった瞼を閉じる。

目を瞑り、遠退いていくざわめきの中に意識を委ねる。自分がいなくても周り続ける世界に同化していく感覚は、眠りに落ちる時と似ていた。耳の奥に響いていた雑音が徐々にか細くなり、重力から解放されて、身体ごと街に溶けていく。

止まらない世界の真っ只中で、夢想と現実の狭間で浮遊する。

どちらにいいのかなどわからない
どちらにしても、変わらない

ズボンのポケットで震えた携帯電話で、シャツダウンされかけた意識が覚めた。同時に、口にしたままだった煙草から燃えかすが落ち、組んでいた腕に白と黒の灰がかかる。シャツごしのそれを払いのけ、受信したメールを確認しまた元の場所に戻した。指の先ほどに縮んだ煙草をシガーケースに入れ、脚を組み直す。視界に影が差し、声をかけられたのは、それからすぐのことだった。

「お待たせしましてすみません」

パーマなのか地毛なのかわからないようはウェーブのかかった髪に、高そうなスーツを着た男が、その倍は体重がありそうな男達数名を後ろに従えながら俺を見下ろしていた。14時に落ち合う予定のはずだったが、左手首の腕時計の長針はすでに3を過ぎている。先刻の挨拶には勿論、立ち上がった俺をあくまでも見下ろすようなその目付きからは、申し訳なさなど微塵も感じられなかった。

「平日の割に意外と道が混んでましてね。早めに出てきたつもりだ

ったんですが、さすがに人も車も尋常じゃない量だな」

やれやれ、などと芝居がかった風に、そいつは首を振る。自分から田舎者だと公言しているようなものだ。待ち合わせで有名なスポーツに、わざわざ車で来ようと言うのが間違っている。ここに群がるのは、混雑率降車率ともに全国ナンバー1の駅の利用者がほとんどだ。この街に馴染みのない人間には、苛立ちや息苦しさしか感じないのも無理はない。

「こちらが遅刻しておいて何なのですが、時間が限られているので急ぎます。どうぞこちらへ」

信号待ちで溢れる人混みに入り込んでいくそいつのウェーブ髪を捕らえながら、俺は車道に出て、その十歩ほど後ろから追った。

新宿通りのデパート街に堂々と駐車されていたポルシェに乗り込むと、まず携帯電話の電源を切るように言われた。電源を切ったそれを再びズボンの右ポケットにしまう。今度は、飛行機に備え付けられているようなアイマスクを手渡された。両隣にどっかり座り込んだレスラー男のうち一人が、視線で着ける、と促してくる。安っぽいパッケージから取りだし目元に被せたアイマスクは、ポリエステルと石油の安っぽい臭いがした。

「しばらくご辛抱下さい。到着したら声かけますんで」

助手席であろう前方から声が聞こえたのと同時に、車が動き出した。道順を計算気にはなれず、暗闇の中で再び目を閉じる。アイマスクの素材と革張りのシートの混ざった臭いに鼻がおかしくなりそうだったが、視覚以外の感覚は閉ざさずに尖らせておいた。車を出たら息の根を止められていた、なんていう醜態を晒すのはごめんだ。

さすが高級車だけあって、視界が遮断されているにもかかわらず、エンジン音はおろか走行音も揺れもほとんど伝わってこない。時折信号待ちであろう停車や右折左折を認識することはできたが、今どこを走っているかは皆目見当もつかなかった。時間の感覚も、当の昔になくなっていく。あるのは化学素材の臭いと、左右から伝わってくる暑苦しい熱気だけだ。暗闇の中の、おまけにスーパーサイズの野郎二人に挟まれながらの旅は、お世辞にも快適とは言えなかった。

あの時もそうだった

自分の3倍は体格のある男たちに挟まれながら、どこへ向かうかわからないまま高級車に揺られていた。実のところ、あれが本当に高級車であったのかは記憶にない。ただ、それまで使っていたミニバンとは、広さを初め、シートの質感や匂い、窓の大きさまで何もかもが違っていった。何を思い、何を考えていたかなどはこれっぽっち

も覚えていない。ただ、スモークガラスのせいで薄暗い車内から、唯一光の射すフロントガラスの先にどこまでも長く続いていた道路が、やけに鮮明に見えていた。

あれから10年以上経ったのに、今でも同じだ

行き先も知らないまま揺られて、運ばれるがまま

もがくことも、逃げ出すこともしないまま

ただ、連れて行かれるだけ

閉ざされた闇の中に、果てのない、まっすぐに伸びた道路が浮かんでくる。

真夏の太陽に焼かれるアスファルトと、さらにその先に浮かぶ、青空に映えた白い入道雲が映る。

手を伸ばせば触れられそうなその景色が、届くことのない、終わらない幻想であることは、あの時から既にわかっていた。

いくら焦がれても、俺の意思など構わずに世界は回り、遠ざかる

「ご苦労様です。到着しました」

声がかかった頃には、石油の臭いも両脇の暑苦しさもどこかへ行っていた。

目隠しを外すことを許されたのは、車から降りて建物の中に誘導され、エレベーターで地上高く運ばれた先であった。

まず目に入ったのは、空港で見かけるような金属探知機のゲートだった。携帯電話とステンレス製のシガーケース、さらにはベルトまでを預けて、味気のないゲートをくぐる。向こう側に出る前に、け

たたましいアラーム音が響いた。間髪入れず、例の縦横ともに幅広いスタッフが、壁のように眼前に立ち塞がった。抵抗しないのいいことに、そのままの流れでボディチェックが始まった。下手に動くとも面倒なので、呼吸を整え直立を保つ。

黙々と手を動かし続けていたスタッフが、突如左胸のポケットに手をつ突っ込んできた。反射的に身を引き、手を払う。何か壁にぶつかり、続いて床に落ちる音がする。ほぼ同時に、どこにいたのか同じような格好、体格の男たちが音もなく現れ、周りを取り囲まれた。ここまで似たような外観の人間を集めるのは、そう容易ではないだろう。そんなことを思っているうちに、初めからいた一人が、落としたそれを俺の目の前に突きつけてきた。

「これは？」

「五百円玉」

「何故これだけ別にしてある」

「買い物頼まれててな」

厳密に言えば財布から失敬してきたのだが、あながち嘘ではない。

「預かせてもらっ」

「別に発信器でも盗聴器でもない。ただの五百円玉だ」

「信用できん」

返答を聞かずにそいつは別の男に五百円玉を手渡すと、他の奴らと

一緒にその場をあとにした。残された二人が一層念入りにボディチェックを再開する。時間自体はそれほど長くかからなかったものの、野郎二人にべたべたと触れられるのは不快としか言いようがなかった。

地獄の身体検査が終わると、もう一度無機質なゲートを通らさせられた。今度は何事もなく通過する。その足で、さらに奥の方の部屋に誘導された。

スライド式の扉を開けて正面に映ったのは、外界を完全に遮断している黒のブラインドだった。促されて足を踏み入れたのと同時に、背にしていたドアが閉められ、鍵のかかる音がした。目隠しといい金属探知機といい、随分とセキュリティにはうるさい連中らしい。

部屋自体は十畳程であり広くなく、薄暗さのせいで余計に窮屈に感じられた。その狭い空間の中央には不釣り合いな程横に広いデスクが置かれており、窓辺と机に挟まるように、黒革張りの椅子に腰かけた男がいた。

「ようこそ」

ビジネスライクな挨拶に、顎を引いて返す。

「急にお呼び立てして申し訳ない。私はこういふ者です」

不意に横から、名刺を持った手が伸びてくる。先刻のパーマ男だ。自分の名刺を他人に渡させる奴を見るのは初めてだった。最早呆れる気力もなく、無言でそれを受けとる。

「ファンダメンタル・システムズCEO兼代表取締役、キモトといいます。主に企業向けのファイナンスシステムのプログラミング及びメンテナンスを手掛けております」

純日本人顔の割に、やけに横文字の多い紹介だった。こちらに名刺の持ち合わせなどあるはずもなく、その旨を伝える。

「構いませんよ。貴方のことはよく存じております」

「顔を合わせるのは初めてかと」

「初対面ですよ。直接会わなくても、情報を収集する手段はいくらでもありますし」

当然の事実を自信たっぷりに告げられ馬鹿にされた気分になったが、正論だったので相槌を打つ。

「それで、ご用件は」

「率直に言わせて頂きます。貴方の行動によりもたらされた我々への損害を補償して頂きたい」

「と言うと？」

「これを」

座ったままの奴が言ったのと同時に、またもや横から手が伸びてきた。差し出された書類を受けとり、目を走らせる。

「要は貴方が密告したグラン・ホテルでのカジノ運営の件で、仕事が無くなってしまったんですよ、私たち。あちら様に当社の資金管理システムをご利用いただいたんですが、お陰様でカジノ運営は絶望的、ホテル業務すらも今後まともに行えるかしかない状態でしょう。うちみたいなベンチャー企業にはたった一件のお客様の損失でも致命的だね。会社の存続に関わる危機なんですよ」

「それで、一時補償金5000万円と」

「当面の社員の賃金と、会社の維持費に必要最低限の分を計算して、さらに非道とはいえ貴方もお仕事でなさったということを考慮したうえでの金額です」

渡されたのは、5000万円の保証金と月毎に上乗せされる利子の請求書に、何故か雇用契約書、そして、病院で見るカルテのような書類の束だった。顔のアップや、明らかに隠れて撮ったであろう写真もある。カルテらしき書類には、生年月日や身長体重、握力視力などの自分でもわからないようなデータが列挙されていた。

「調べさせていただいたところ、それなりにキャリアもお金もお持ちのようでしたのでね。もちろん、一括とは言いません。万一持ち合わせのないようでしたら、新しい就職先もご紹介しますよ。小さな会社ですが、お付き合いさせていただいているところは多いんで

すよ」

そういつて、キモトは初めて感情のこもった笑みを見せた。その視線の先にいたのは俺ではない。振り返ると、派手な柄シャツにオーバーサイズのズボンをだぶつかせた、姿勢も目つきも悪い男が二人、ドアの前から俺の方にガンを飛ばしていた。どう見ても堅気の人間ではない。殺気のこもった視線を無視し、改めて書類に目を通す。

「煙草の銘柄に、服の系統まで」

「我が社の一大事ですからねえ。気を悪くされましたならご勘弁を。ですが正直、貴方が我々になさった仕打ちを考えていただくと、この程度のことは当然かと」

「他人のことをどれだけ調べられても、気になんてなりませんよ」

一瞬にして、その場だけ空気がなくなった。ように思えた。

全員が窒息したように黙り込み、薄暗い空間が一層重苦しくなった。

「他、人？」

何秒か後にかろうじて言葉を発したのは、すっかり血の気を失ったキモトだった。それでも、口元にはひきつった笑みを浮かべようと努力している。

「ここに記されているのは、貴方の、神城正の情報では」

「俺は一度も名乗っていないし、そもそもカミシロタダシなんていう人間は存在しない。ここに載っているデータも、俺と共通しているのは性別くらいだ」

「…冗談はよしていただきたい」

「冗談は好きじゃない」

「…嵌められたか」

「嵌めたつもりもない。そっちが勝手に勘違いして、勝手に俺を連れて来ただけだろ」

言い切る前に、ドスン と派手な音が狭い部屋に響く。横から飛びかかってきた巨体を避けたら、反対側、つまり俺の左側にあった壁に、その巨漢が見事にぶつかっていたのだった。間を空けず、背後からもう一人に羽交い絞めにされかけたところを、体制を低くし膝を使って、鳩尾に肘鉄をめり込ませる。声なのか呻きなのかわからない音を発しながら、スーツの大男二人は床に這いつくばった。

「貴様」

キモトの口元から作り笑いは消えており、代わりにこめかみと眉間の辺りに筋が浮き出している。

「最初から仕組んでいたのか。うちを潰すために」

「そっちだって人違いで5000万ふんだくろうとしてたんじゃねえか。俺はここを潰すつもりも、あんたらといざこざ起こす気はな

「かつたけどな」

「だったら、目的は何だ。なぜ俺たちを騙してまでここに来た？」

「仕事だから」

「何？」

「仕事だから」

聞き返されたから言い直すという当たり前の行動に、目の前の男の堪忍袋の緒は切れたようだった。キモトはバンと机に手をついて立ち上がり、何を言ったか聞き取れないような喚き声をあげた。一瞬遅れて、背後からこちらにも意味の分りかねる絶叫とともに、ドア横に立っていた二人が背後から向かってきた。

一辺に殴り掛かってきたのを見ると、喧嘩慣れはしていても戦闘に関しては素人らしい。実際、片方は図体だけがでかく動きはとろかったため、顎に一発決めただけでのびてしまった。

もう一方はそれなりに素早さもあり、細身の割に動きに力がこもっていた。左の頬に入ったストレートはなかなか強烈で、一瞬視界が揺らぐ。そのまま蹴りで倒されそうになったところを受け身を取り、体制を整える。再びとびかかってきたそいつを背後に回ってかわし、その首に手刀を叩き込んだ。

「うああああ！！」

叫び声とともに突然眼前に現れたのは、あのパーマ男だった。警棒

のようなものをめちやくちやに振り回しながら向かってくる。大袈裟で勢いに任せた動きを読むのは容易く、振り下ろされた警棒を左手で掴んで止め、肘の関節に一発拳を入れる。警棒が奴の手を離れたところを掠め取り、その先端を腹に思いきり突き刺した。見る影もなくなつたその髪を振り乱しながら、奴は口を開けたまま床に転がった。

部屋に立っているのは、その時点で俺一人だつた。キモトはデスクの後ろに座り込んでいるらしく、この角度からは見えない。ガチガチと小刻みに歯が鳴っている音だけが小さく響いていた。これ以上長居する理由もなく、床に転がっている男たちを避けながら、出口に向かう。スライド式のドアに手を触れた瞬間、短い金属音が響き、少し遅れて何か質量のあるものが床に落ちた。

「そ…のドアは、簡単には開かないぞ」

声と歯を震わせたままのキモトが、壁に寄り掛かるようにしながらやつのことで立ち上がっていた。足元に落ちた大きな鋏を拾い上げた俺を見て、また先刻の引きつった笑みを見せる。

「ご覧の通りそのドアは鉄製で、開閉手段にアナログ媒体は存在しない。限られた人物の指紋認証と及び暗証番号の二重ロックがかかっている。今、この場でどちらの手段も握っているのは私しかないというわけです」

喋っているうちに震えは収まったようで、口調にもとの余裕と傲慢さが戻っていた。実にわかりやすい奴だ。

「そいつは厄介だな」

「ことと次第によつては番号を教えて、指をお貸ししてもいいですよ。貴方が床に額をつけて謝罪し、我が社と私の為に働くというならね」

荒れた部屋に、キモトの狂ったような高笑いがかかります。ガキの頃に見ていたテレビアニメの悪役のような笑い方だ。どこか芝居がかった口調といい、この男は俳優にでも転職した方がよいのではないか。そんなお節介を考えながら、腕時計に目をやる。この建物に入ってから、20分弱が過ぎていた。

ぎりぎりだな

一呼吸置いて、金属づくりの取っ手を思い切り引く。

薄暗い部屋に廊下からの明かりが差したのとキモトの笑い声が急停止したのは、ほぼ同時だった。

「な……なん……!？」

「さて、何ででしょう」

思わず軽口を叩きながら、意味のこもらない音を発しているキモトに一旦は背を向けたが、あることを思い出し立ち止まる。

「これ」

「…へ？」

「返す」

手首を使って投げたそれは、上手い具合に何かに刺さったらしく何の音も立たなかった。代わりに、品のない悲鳴がか細く響く。

「もう一度言う。俺はお宅を潰す気はないし、今回のことを大事にしようとは思っていない」

返事がなく聞いているのか否かわからなかったが、一応続けておく。

「グラン・ホテルとの取引を続けるのも、ヤクザさん方とつるむのも、俺を追うのもあんたの自由だ。ただ、理由はどうあれ一度「闇」に足をつっ込んだんなら、相応の犠牲は覚悟しとけ」

「…闇…」

「それができねえなら、素人が裏の世界にしゃしゃり出てくんな」

忠告と一緒に唾でも吐き出してやりたかったが、やめておいた。いとも容易く開いた出口の扉を、出来るだけ音の立つように力任せに

閉めた。

ガコン　と重く閉ざされたドアの向こうから、お前は誰なんだと背中越しに絶叫を聞いた。

行きに時間がかかった割に、そのビルから自宅の、ルーチエの2階にある6畳間に辿り着くまでは、徒歩で20分もかからなかった。

例のビルからは、非常階段で抜け出す際に西新宿の高層ビル群がすぐそこによく見えた。車で移動するまでもない距離を、馬鹿みたいに迂回しまくって時間を稼いだわけだ。仕事とはいえ、とんだ茶番に付き合わされたものだ。

何から何まで中途半端な連中だったが、それでも報酬は懐に入ってくる。人生におけるこの1時間弱がどのくらいに換金されて戻ってくるのか、その基準を俺はいまだに知らない。俺が費やした時間と、奴らが失った利益やコネクション、プライドが、どのくらいに換金され、どのくらいの価値を持つのか。少なくとも、それを決める権

限もなければ知識も俺にはない。最低限とは言え衣食住が保障されている以上、興味は湧かなかったし必要であるとも思えなかった。

2階に通じる外の階段を登っている最中に、マスターのおっさんの笑い声が聞こえてきた。寡黙というには程遠い人だが、接客中はそれなりに普段のラテン気質を抑えるよう努力している、らしい。そのおっさんが外に響く程大笑いしているということは、余程機嫌がいいか、もしかしたら昼間から酒でも喰らっているのか。下手に顔を出せば、無理にでも店番を押し付けられるに違いない。なるべく足音を忍ばせ、気配を消して部屋へ入った。

一応今の生活の拠点である6畳の洋室は、そこらのビジネスホテルよりも殺風景で、とにかくものがない。パソコンとプリンター用のデスク以外には、パイプ式のベッドと、申し訳程度しかない洋服用のラック、あとはゴミ箱くらいしか置いていなかった。実際この部屋は北向きで窓もひとつしかないため、夏は暑く冬は寒い。間借りの身であることもあり、できるだけ部屋にいる時間を減らすようにしていたら、こうなっただけの話だった。

その6畳間に帰宅し、玄関先で無駄に底の厚い靴を脱ぎ捨てた直後に、携帯が左のポケットで振動し始めた。ディスプレイの表示を見ず、通話ボタンを押して電話に出た。

「随分タイミングいいのな」

「何が？」

「電話。家着くの見計らってたみたいだ」

「晃斗が寛ぎ始める前にすませとこうと思ってさ」
「監視社会の賜物だな…っ」と

携帯を片手にピアスを外すのは容易ではなく、フローリングに落と
してしまふ。

「今落つことしたでしょ。凄い音したよ」

「樹脂越しなんだから壊れやしねえよ。おかげであのザルセキュリティにも引つ掛からずに済んだ」

「当然だよ。それだけの技術を詰め込んであるんだから。なのに小
銭入れっぱなしでチェック受けて引つ掛かるなんて、ばれたのかと
思っちゃった」

「あいつらこれの正体どころか、存在にすら気づいてなかったよ」

拾いあげた指先で、ルビーを型どつた紅が西に傾きかけた日に光る。

「それもどうかと思うけどね。なんならずっと持ってたもいいよ」
「いらねえよ」

「こつちでOFFにすれば、盗聴もGPS機能もなくなるのに」

「お前のことだ。いつ悪戯に使われるかわかったもんじゃねえ」

「信用ないなあ」

「信用はビジネスに付き物だぜ。よくも悪くも」

「よく知ってるよ。それが商品だからね、僕の場合」

「それにしちゃあえげつねえ真似するじゃねえの。神城正さんよ」

「あれ、ばれてたんだ」

涼しい声で、おそらく涼しい顔をしながら言う、電話の向こうの奴の姿が目に見えぬ。

「お前の正体知らねえま情報をもみこみにしてたあいつらも大概間抜けだけだな、もうちょいマシな設定はなかったのか」

「いいじゃん。外国帰りの元マフィアのJACKなんて探せばいくらでもあるよ」

「俺が言ってるのは、身長190センチの金髪で、毛深くて、おまけに顔に傷があるなんて設定必要だったのかってことだよ」

「傷痕とか、なんかアニメっぽくてかつこいいじゃん」

「化けんのは俺だってこと忘れんな。痒くてしょうがねえ」

左の頬骨辺りに作った傷跡は、少し指で力を入れて引っ掻くと案外簡単にとれてしまった。皮膚が引っ張られたような痛みが走り、絆創膏のようなフィルム状のテープがはがれる。前髪でいくらか隠れるようにしていたとは言え、こんなメイクとも言えないような特殊メイクでよく気づかれなかったものだ。

「だいたい今回は博打が過ぎてたんだ。俺の変装もピアスもばれない保証はなかったし、GPSで位置情報が送れていても、遠隔でジャミングしながら奴らのパソコンに侵入するのはリスクが大きかっただろ。下手したら俺だけじゃなくてお前の方にも手が回ってたかもな」

「そのリスクをできるだけ回避する為にも、晃斗に直接潜り込んでもらったんだよ。おかげで彼らとグラン・グループとの関係も決定的になったし、欲しかった情報も手に入ったし」

「こっちは危うく軟禁されかけたけどな」

「鍵がアナログじゃなくてよかったじゃん。あと2分23秒早かったら、ドアの前で相当格好悪いことになってたよ」

「五百円玉のせいで十分格好悪かったよ。思い出したくもねえ」

「それは自業自得でしょ。ちゃんと回収して使ったみたいだからいいけどさ」

「物理的な証拠は何も残してねえよ。これで足がついたらお前のせいってことだ」

「そしたら、”JET”に全部任せて僕はおさらばさせてもらうよ」「やっぱえげつねえよ、お前」

それから二言も交わさないうちに、キャッチが入ったと言い残してシンは一方的に電話を切った。結局要件がわからないままだったが、奴の気紛れは毎度のことだ。通話を終えた携帯電話をベッドに放り、ついでにピアス、もとい「技術の結晶」も窓辺に置いて、外階段に通じるドアを開いた。

新宿御苑に程近い裏通りに面したこの歩道は、駅前の広場からあまり離れていないにも関わらず、人通りが少なく日中は常に静かだっ

た。そんな裏道でも、すぐ傍の飲食店街が賑わう時間帯になればそれなりに人は増える。

予想外に仕事が早く片付いてしまい、その変わり目の時間までは何もすることがなくなってしまった。ここ数週間関わっていた一連の任務は先のＩＴ企業訪問で終了してしまったので、新たな依頼が入るまでは、愛すべき退屈な日常を過ごすことになる。街をぶらぶらたり読書したりなど、時間を潰す選択肢は山程あったが、何をしようにもどうも気分が乗らなかった。おそらく、柄にもなく昔のことを思い出したからだろう。

あの頃見ていた世界と、ここからこうして見下ろしている世界は、表裏や明暗などでは言い尽くせないほど何もかもが違う。望んで足を踏み入れたのではないにしろ、こちら側を選んだのは自分の意思だ。流されながらの生き方の中にもいくつか分かれ道はあったし、選択も、抵抗も、逃避もできたはずだった。

今思えば、人生のという意味に置いては、あの車に乗ることを選んだのが、最後の選択だった。

それから、ただ生きるために生きてきた。

どんな深みにはまっても

どんなに手を汚しても

どんなに死にたくなっても

生きて、生き抜いて、裁きを受けて、

これ以上、連鎖させないために

つけ忘れたまま唇に挟んでいた煙草に、ライターで火を灯す。溜め息と共に、白い煙が筋を作る。

毒を吸い込み、毒を吐き出す。

その行為に、意味などなくても

遠くの雑踏に混ざって、カラン と階下のドアが開いてベルが鳴る。
続いて、ご馳走様でした、と女の声が聞こえた。

聞き覚えのあるその声に、無意識に目をやる。

黒の長髪に、紺色のリュックの後ろ姿。

数日前に昼間から店で居眠りしていった、あの娘だった。

「またのお越しを」

普段なら有り得ないくらいに格好つけたおっさんの声に、彼女が振り向いて会釈を返す。

その視線が、こちらを捕らえた。ように見えた。

咄嗟に柵に預けていた身を立たせたが、その場から離れるには時が経ち過ぎていた。変に身動きするのも不自然に思い、俺を見上げている彼女の目を見据える。

「…ですかー？」

不意に口を開いた彼女の言葉が聞き取れず、思わずえ？と尋ね返してしまふ。

「イメチェンですかー？」

片手で自分の頭を指差し、もう一方の手でメガホンを作りながらの、大声の返事が返ってきた。後ろを通った通行人が何事かと言うようにこちらを見てきたが、一秒も経たないうちに元の方を向いて去っていく。

「まあ、な」

満更嘘ではないので、肯定しておく。

「大分明るくしたんですね。プラチナブロンドみたい」

「もう戻すよ。落ち着かなくてさ」

「でも日本人でその色が合う人って、そんなにいないですよ」

「合ってるのか、これ」

「どっちかって言うと前の方がよかったけど」

「知ってる」

自虐を込めた応えに、彼女はあははと笑う。

「髪染めるのって大変じゃないですか？眉毛も同じ色にしないと不自然だし、伸びたら生え際が目立つちゃうし」

「しかも禿げやすくなるらしいな」

「想像したくない。黒が一番ですよ、やっぱり」

「よくわかったな」

「え？」

「髪染めて、しかも結構距離あるのに、俺だって」

「わかりますよー」

「そうか」

彼女はなんの邪気もなく言ったのだろうが、自分の変装があまり意味をなしてなかったのかと思うと馬鹿らしくなった。たった一度しか合っていない人間に気付かれるなんて、街で見かけるコスプレイヤーのほうが余程マシだ。

「お兄さん、なんか人と違うっていうか。目立つ訳じゃないんだけど、オーラがあるのかな」

「それは喜んでいいのか？」

「いい意味ですよ」

世辞にしろ本気にしろ、なかなか鋭い目を持っているのかも知れない。見たところどこにでもいそうな若い娘だが、注意に越したことはない。

仕事の準備があるから、と半分本当の言い訳をして、会話を切り上げた。また来ます、と手を振り彼女は小走りで去っていった。知らないうちに靴の裏で消していた煙草を拾い上げ、扉を隔てた六畳間を通り抜けて、そのまま風呂場に直行した。

「なんだお前か。誰かと思ったぜ」

風呂上がりの飲み物を取りに下へ降りていくと、食材を運んでいたおっさんがこちらを見るなり言った。

「言ってくれるじゃねえか」

「さっきまで金髪の水サ髪だったのに、いきなり黒に戻って短くなってるんだもんよ。髭もなくなってるし。自分でやったのか」

「色はスプレーだったから洗って落ちたし、髪も適当に自分で切った。いつまでもあんなもさい格好してられるかよ」

「ルナちゃんのためか」

がぶ飲みしていたミネラルウォーターが、危うく喉を逆流しかけた。むせる寸前に辛うじて空気もろとも飲み込み、何とか咳き込むのを免れる。

「誰だよ、それ」

「わかってるくせに聞き返して来るな。随分仲良さげにしてたじゃねえの」

「聞いてたのかよ」

「やっぱわかってんじゃねえか」

「直接は教わってねえよ。こないだ会話途中で聞いたただけだ」

ああそうかい、などと妙ににやつきながらおっさんは作業に戻っていった。半分程に減った水を冷蔵庫に戻そうとした時、晃斗、と声をかけられた。

「わかってんだろ」

いつものように、何を考えているかわからない飄々とした口調の奥底には、明確な意図と疑念があった。こういう時のあの人がどんな表情をしているかは、同じ空間にいらなくてもわかる。

わかってる、とだけ答え、しまいかけたミネラルウォーターを一気に飲み干した。

味のない水が、音もなく身体の中に流れ落ちていった。

1、JET（後書き）

ご無沙汰しております、樺美です。ご覧いただいてありがとうございます。

何とか本編スタートまでこぎつけました。

訳あり青年晃斗君のある一日、早速暴れてます。アクション難しい…

ITやコンピュータ系はサッパリなのですが、Wikiさんやぐるさん、図書館の本たちの力を借りて、むしろ依存しまくって典型的文系人なりにできるだけの表現はできたかなと思います。

次回は馨さんのお話。このひと、また悩んでいます。

ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5978x/>

Eclipse

2012年1月8日20時53分発行